

平戸藩江戸屋敷「蓬萊園」に織り込まれた景色

永松義博*, 杉本和宏, 吉田 健

南九州大学 環境園芸学部 環境園芸学科

2016年10月1日受付; 2017年2月1日受理

The interwoven landscapes of “Hourai-En”: Gardens of the Hirado Domain’s Daimyo Residence

Yoshihiro Nagamatsu*, Kazuhiro Sugimoto, Takeshi Yoshida

Faculty of Environmental Horticulture, Minami-Kyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 1, 2016; Accepted February 1, 2017

The “Hourai-En” gardens at the Matsura clan’s daimyo residence were created within the Hirado Domain’s Torigoe grounds during the Kan-ei era (1624–1645) on the order of the Domain’s third daimyo, Matsura Takanobu, who primarily entrusted the landscaping to Kobori Enshu and Kougetsu Sougan. Later, the tenth Hirado daimyo, Matsura Hiromu, commissioned Tachibana Moribe to record the Hourai-En’s history. This history was produced in the form of a chronicle of the composition of the gardens entitled the “Thirty-six Views of the Hourai-En.” Using available historical materials about the Matsura clan to reveal the gardens’ details, and considering Matsura Hiromu’s sentiments toward his home and Hirado, this study also examined the various designs within the gardens. Thus, this study revealed the presence of a strong sense of nostalgia for Hirado within the design of the Hourai-En gardens.

Key words: Hirado-Domain, Hourai-en ki, Tachibana Moribe, Matsura Hiromu, Hirado.

1. はじめに

慶長8年（1603）の江戸開府に伴い参勤交代が制度化され、下賜された土地を基盤として各藩大名の屋敷地が造成された。明暦3年（1657）の大火以後は、罹災時の退避場所として、本拠地とは別に中屋敷・下屋敷といった広大な土地が与えられた。庭園には大名自身の慰楽に加え、他藩大名の接待および交流のため、折々に工夫をこらした意匠が盛り込まれた。

平戸藩松浦家の江戸屋敷「蓬萊園」は、後樂園、六義園とともに都下三大名園に数えられたが、大正12年（1923）に発生した関東大震災により荒廃し、さらに昭和12年（1937）、東京都立忍岡高等学校建造のため、敷地は埋め立てられ、300年に亘る庭園の歴史に幕を下ろした。同園については、古文書『蓬萊園記』により、園内三十六景の存在が明らかとなった。

本研究では、松浦家に伝わる史料に基づいて往時の様子を明らかにすると共に、庭園に込められた意匠や藩主の心情を考察することを目的とした。

2. 研究方法

国立国会図書館に所蔵される『蓬萊園記』『蓬萊園記艸』¹⁾、雅名の由来・植栽・添景物などの情報に加え、平戸藩の出来事についてまとめられた『亀岡随筆』²⁾、日本各地の話題を収録した『甲子夜話』³⁾、『蓬萊園記』に収められた「蓬萊園之図」、東京市史稿に収められた「蓬萊園之図」に基づいて蓬萊園の詳細を調査した。

3. 蓬萊園の概要

(1) 蓬萊園の作庭経緯

蓬萊園は、寛永年間(1624～1645)に第3代平戸藩主・松浦隆信が、作事奉行の小堀遠州と平戸正宗寺で住持を務めた僧の江月らを中心に指揮を執らせ、平戸藩上屋敷「鳥越邸」内に作庭した「向東庵」を起源とする^{4, 6, 7)}(図1)。約1万5000坪の上屋敷の敷地の中、庭園は約2500坪でその大部分が池泉である。

天保年間(1830～1844)の「大江戸絵図」(図2)には、平戸藩上屋敷と下屋敷が描かれている。鳥越邸は後に

*連絡著者

第4代藩主・松浦鎮信に受け継がれ、第10代藩主・松浦熙の時代に「蓬萊園」と改名された。

(2) 園内の構成と装飾

土地を拝領した当時は葦だけが生き茂る沼だったが、敷地脇の三味線堀から潮入りの水を引き、土を運び入れ、年月を経て広大な庭園に仕立てられた¹⁾(図3)。また、園内の池は掘ったものではなく、低地が自然にこのような形になったと記されている¹⁾(図4)。園内には島、磯、崎、浦、浜、入江を設け、池の周囲には

丘、林、森が造られた。かつて陸奥街道が池の片端に通っていたことから、一里塚、小野小町の社、苔むした石塔など古くから伝わるものが庭園の飾りとなっていた¹⁾(図5)。

松浦鎮信の時代(1675～1689)には、園池南側の護岸石組みを、山鹿素行の築城法に則り城壁の形を模した石垣状護岸に改修している⁵⁾。

蓬萊園を描いた絵図のうち、最も古いものは文化9年(1812)に描かれた「鳥越邸之図」(図6)である。住居部分が主となっており、後に描かれた明治31年

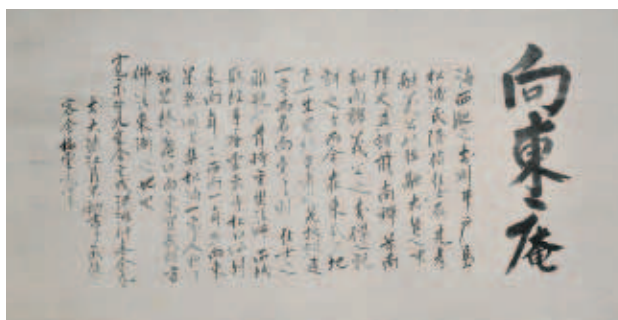


図1. 向東庵の記録

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治43年(1910) 東京都立忍岡高等学校蔵

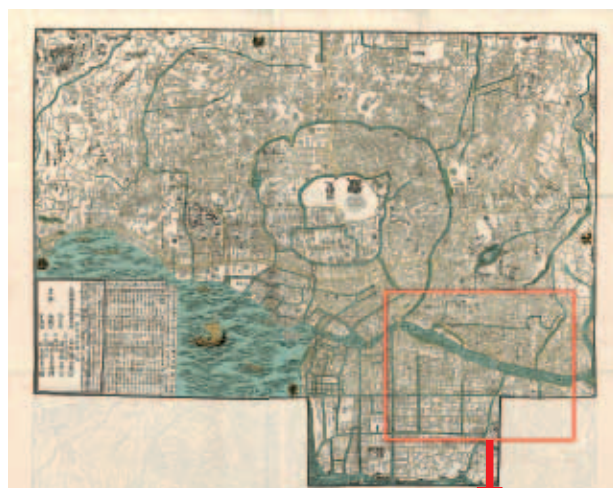


図2. 「大江戸絵図」 天保年間(1830～1844)

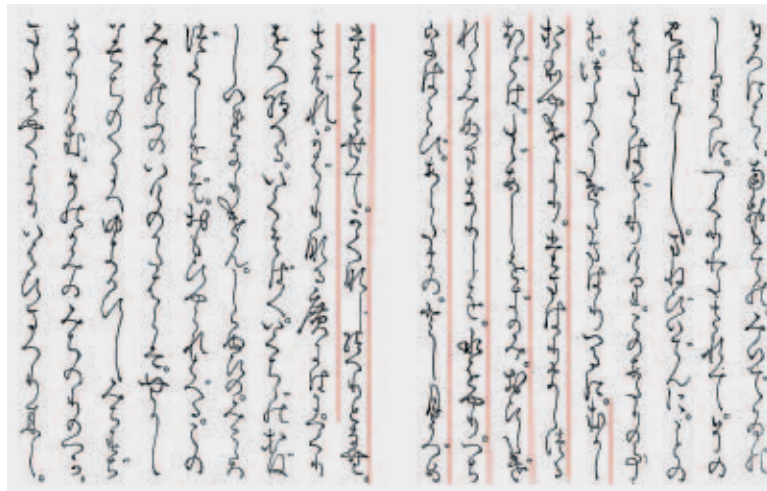


図3. 造成に関する記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

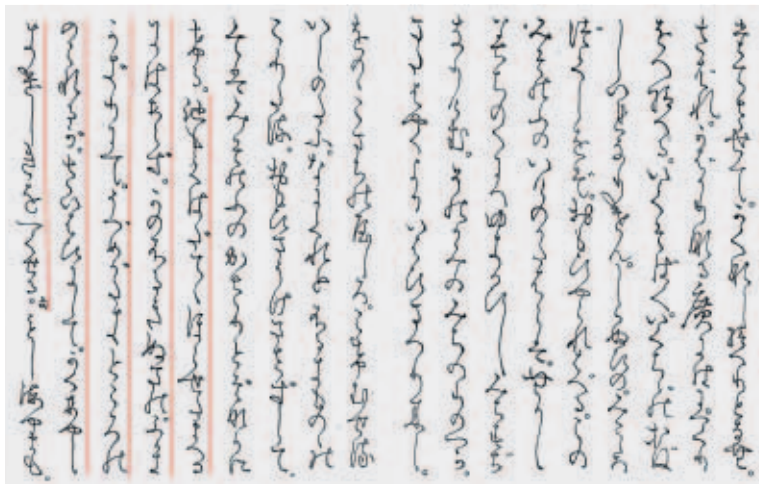


図4. 池に関する記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

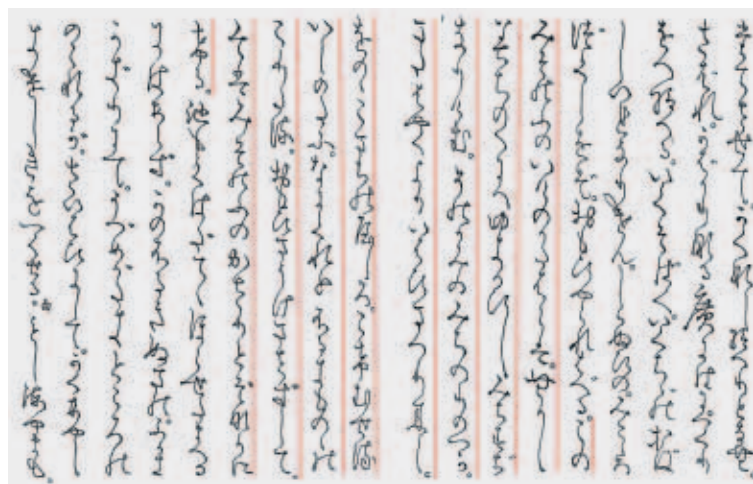


図5. 装飾に関する記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)



図6. 「鳥越邸之図」文化9年(1812) 松浦史料博物館蔵(133×203cm)

(1898)の「蓬萊園之図」(図7)と比較すると、池泉、中島の形などは大きくは変わっていないことがわかる。

(3) 火災による園内の変遷

蓬萊園は幕末まで平戸藩上屋敷庭園として利用され

たが、頻発する火災により類焼した(表1)。

寛永18年(1641)、もともと上屋敷だった元誓願寺前屋敷が焼失したことから、その翌年(1642)に鳥越邸を上屋敷として移転したと伝わる⁸⁾。

文化3年(1806)3月の火災では、池泉脇の「金綺樓」

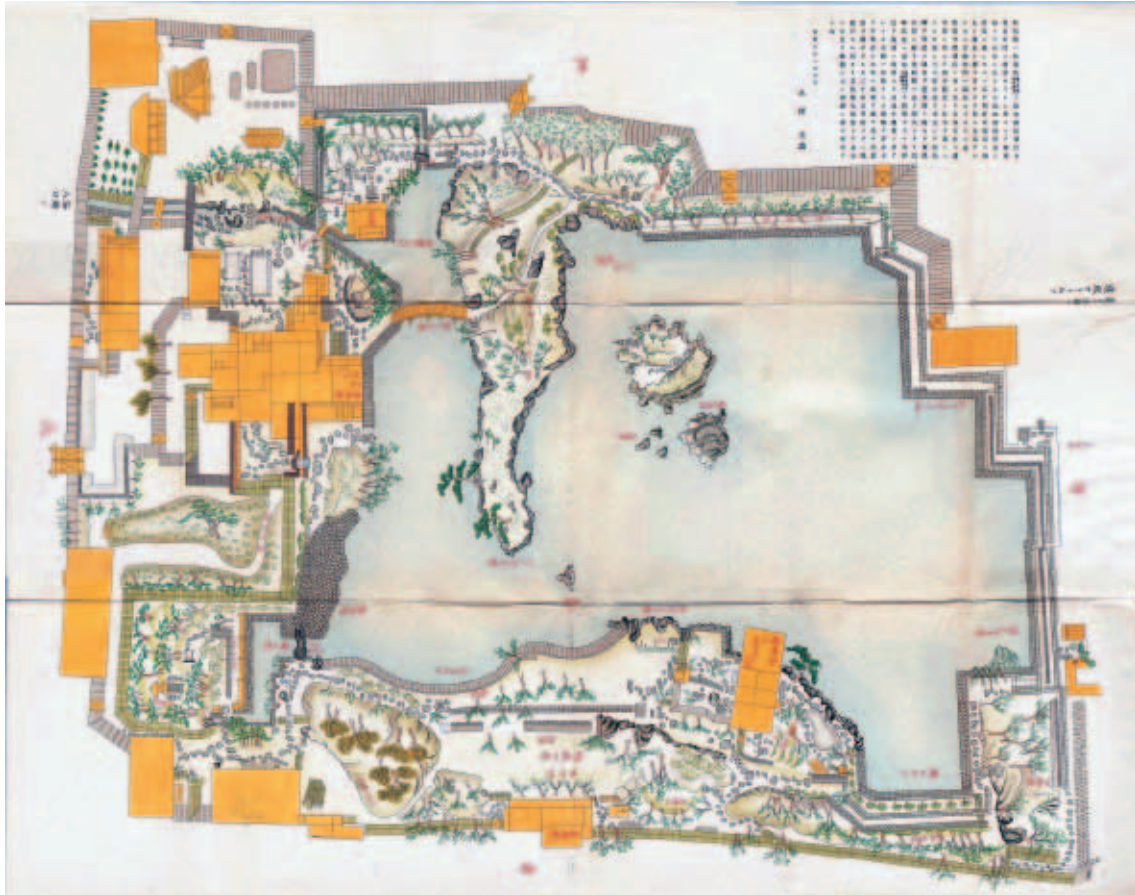


図7.「蓬萊園之図」明治31年(1898)『東京市史稿』所収 国立国会図書館蔵

表1. 蓬萊園年表

寛永年間 (1624 ~ 1645)	・ 第3代松浦隆信、向柳原に小堀遠と僧の江月に命じて向東庵を築く
寛永14 ~ 元禄2年 (1637 ~ 1689)	・ 第4代松浦鎮信、山鹿流築城法に則り、園内の石垣を改修 ・ 第5代松浦棟、鳥越邸において誕生
安永4 ~ 文化3年 (1775 ~ 1806)	・ 第9代松浦清の藩主時代に、園舎、詠帰亭、金綺樓が建造
文化3年 (1806)	・ 第10代松浦熙、鳥越邸を継承 ・ 江戸大火によって金綺樓、詠帰亭消失
文化5年 (1808)	・ 仮住居より鳥越邸に引き移る
文政7年 (1824)	・ 防火の神「八天狗神」を取り寄せ火除祈願
天保3年 (1832)	・ 橘守部、園内へ立ち入り許可 ・ 熙公、橘守部に「蓬萊園記」制作依頼 ・ 橘守部、「蓬萊園三十六景」考案
天保5年 (1834)	・ 「蓬萊園記」完成 ・ 園号を「蓬萊園」と定める
安政年間 (1854 ~ 1860)	・ 大地震に襲われ殿舎が崩壊(安政2年) ・ 下谷広徳寺門前の出火により殿舎が焼失(安政3年)
明治24年 (1891)	・ 第12代平戸藩主松浦詮と橘道守により「蓬萊園記」刊行
大正12年 (1923)	・ 関東大震災により荒廃
昭和12年 (1937)	・ 学校用地として埋め立てられ消失

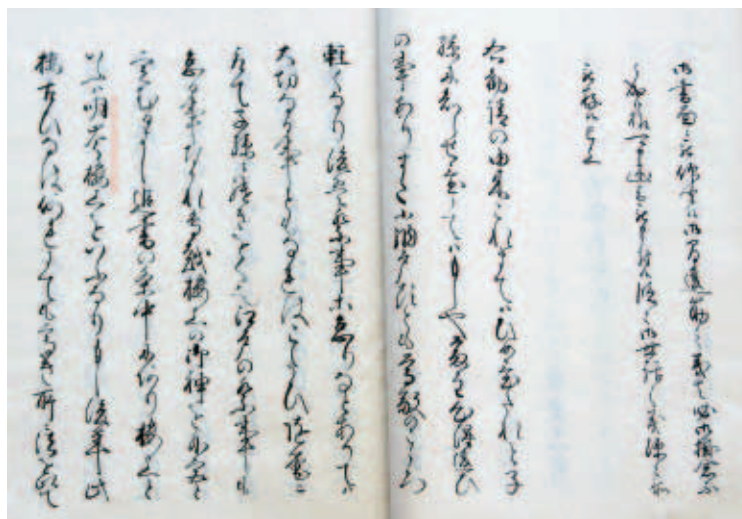


図8. 八天狗神を明岑楼に祀った記述

『亀岡随筆』天保4年(1833)～安政5年(1858)第4巻 松浦史料博物館蔵(29×18cm)

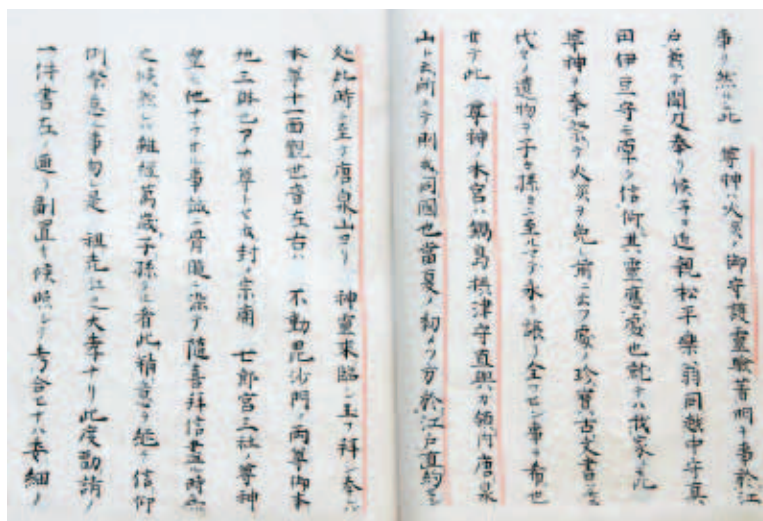


図9. 八天狗神に関する記述

『亀岡随筆』天保4年(1833)～安政5年(1858)第4巻 松浦史料博物館蔵(29×18cm)

と「詠帰亭」が焼失しており、庭園も壊滅的な被害を受けたと推測される。当時藩主であった松浦清は本所屋敷に退避したが、同年11月にそのまま隠居したため、鳥越邸は新藩主・熙の居屋敷となった⁵⁾。

文政7年(1824)には松浦熙が防火の神「八天狗神」尊像を鍋島藩領・唐泉山の本宮から取り寄せ、園内の明岑楼に祀って火除祈願を行ったことが記されている²⁾(図8)。八天狗神は火除け・鎮火の神として祀られた天狗で、肥前国一円から広く信仰された。幕府老中、諸国大名も、鍋島家を通じ同社の分霊を江戸屋敷に送達させた²⁾(図9)。

安政年間(1854～1860)には、度重なる災害により大きな打撃を受けた。安政2年(1855)10月2日の夜、江戸は安政の大地震に襲われ、殿舎が崩壊するという非常な被害を受けた⁹⁾。その翌年の安政3年(1856)

2月15日には下谷広徳寺門前からの出火により、殿舎が焼失した。居住していた松浦詮は一旦本所屋敷に避難したが、蓬萊園の「詠帰亭」が焼け残ったことから、ここに仮住まいすることになった¹⁰⁾。安政4年(1857)6月15日には殿舎が落成し、詮は「詠帰亭」から移ることができた⁵⁾。

(4) 蓬萊園跡地の現状

蓬萊園跡地となっている東京都立忍岡高等学校にはイチョウの古木と「望潮の入江」といわれる池泉の一部がわずかに残るのみである(図10, 11)。明治期頃に撮影された園内の写真が残っており、各景の様子が窺える(図12, 13, 18, 22, 33, 35, 49, 55, 69, 74, 83)。



図10. 残された蓬萊園の一部（現 忍岡高等学校内）

図12. 明治期の蓬萊園（南西からの様子）
東京都立忍岡高等学校蔵

図11. 「望潮の入江」の一部（現 忍岡高等学校内）



図13. 明治期頃の蓬萊園（池の中心部） 東京都立忍岡高等学校蔵

4. 『蓬萊園記』の起稿

(1) 発案者

『蓬萊園記』の発案者である松浦熙（図14）は明治天皇の大叔父にあたる人物で、16歳の時に61,700石の平戸藩第10代藩主となった。地産地消の奨励、新田開発、武備増強など多くの事業を成すかたわら、蹴鞠、能、茶道などを嗜み、香道、打毬の再興を行った。詩歌集、随筆集を著すなど文芸にも秀で、秀麗で独特な書体の碑文・額字等を数多く残している。造園にも強い関心を持ち、平戸に別荘庭園（棲霞園、梅ヶ谷津偕楽園）や、街道沿いの庭園（江迎本陣庭園）などを造成しており、平戸島八十八ヶ所霊場、平戸領地方八奇勝など、藩内の名勝の造成や選定にも係わっていた。

熙は寛政7年（1795）、5歳の時に母・蓮乗院と「金綺樓」の傍にある竹林脇に居住しており、ここは後に「西御殿」と名付けられた²⁾（図15）。松浦熙は『蓬萊園記』の制作において、同園記を国の単なる趣味本とせず、特に地方や田舎の慣例・手本となることを目的とし、名所に雅名をつけ世間から広く事例を集めて解釈をつけよと橘守部に指示している¹⁾。また、園記が完成したからには、末代まで庭の姿は言うに及ばず、草木1本、石ひとつも、これに違うようなことがあつ

図14. 松浦熙 肖像画 天保3年（1832）
松浦史料博物館蔵（125×58cm）

てはならないと伝えている¹⁾。

(2) 作者

『蓬萊園記』は、橘守部という国学者が天保5年（1834）

に書きあげた記録書である。橘守部は「蓬萊園三十六景」を考案し、見どころ36箇所に雅名がつけられ、園内の概要が記録された(図16)。橘守部は天明元年(1781)、伊勢国朝明郡(現:三重県三重郡)の庄屋・飯田家に生まれた。青年期、江戸出府後に勉学を開始し、漢書、四書五経、史記、文選などの漢学、軍書、諸家の系譜、古典、和歌集など、多岐にわたって独学した。儒学者・葛西因是への入塾を経て、国学者への道を邁進し、自身を「池庵」「橘庭麻呂」「生楽園」と称するなど、庭園に由来する雅号を用いた。

『蓬萊園記』制作においては、橘守部が和漢の学問に精通した国学者であったことから、万葉集、古今和歌集、古事記、日本書紀、詞花集といった幅広い教養が、作品中の多くの語句と関連づけられた(表2)。『蓬萊園記』には、橘守部が詠んだとされる和歌が各景ごと記されている(表3)。また、様々な名所や旧跡、地名を挙げて、各景の様子を記録している(表4)。

(3) 蓬萊園(とこよぞの)

橘守部は、園号と雅名の選定を命じられたことが常世

の島に來たような心境であったことに加え、浦島太郎に出てくる蓬萊島(とこよのくに)という語句をふまえ、園号が制定された。橘守部が、唐調よりも大和調を重んじていたことから、漢語読みの蓬萊(ほうらい)ではなく、和語である蓬萊(とこよ)を当てたものと考えられる。

5. 蓬萊園三十六景

(1) 岩間^{いわま}の迫門^{せと}

「岩間の迫門」(図18)は、外部の三味線堀から池水

表2. 関連づけられた教養作品(成立順)

歴史書	古事記(712年編纂)
	万葉集(759年以降)
和歌	古今和歌集(913～914年)
	新後撰和歌集(757～959年)
	古今和歌六帖(970～984年)
	拾遺和歌集(1005～1007年)
	後拾遺和歌集(1086年)
	金葉和歌集(1126年)
	詞花和歌集(1151年)
	千載和歌集(1126年)
	新古今和歌集(1205年)
	順徳院御百首(1232年)
	新勅撰和歌集(1235年)
	新勅撰和歌六帖(1243年)
	玉葉和歌集(1312年)
	風雅和歌集(1349年)
	新拾遺和歌集(1364年)
	新続古今和歌集(1439年)
家集	按納言長方集(1139～1191年)
	拾遺愚草(1233年)
	為家集(年代不明)
物語	源氏物語(1010年頃)
随筆	枕草子(1000年頃)
歌物語	千五百番歌合(1203年)
風土記	伊勢国風土記(年代不明)
詩集	詩経(紀元前11世紀～6世紀頃)
	三體詩(1241～1252年)



図15. 西御殿に関する記述

『亀岡随筆』天保4年(1833)～安政5年(1858)第29巻
松浦史料博物館蔵(29×18cm)

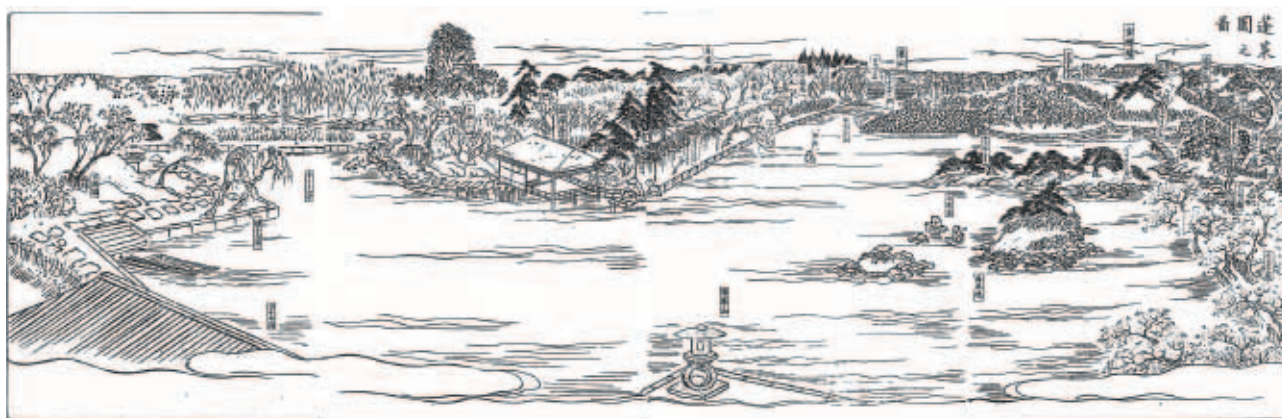


図16. 「蓬萊園之図」 天保5年(1834) 『蓬萊園記』所収 国立国会図書館蔵

表3. 橘守部が詠んだと推測される和歌

岩間の追門	いいしらぬ いはまのせとに いらんとや うらめぐりして しほもさすらん
細江の橋	ゆふ月よ かげもほそ江の はしのうへ をみわたれるは ころなりけり
望潮の入江	とこよまで しほちはるかに へだて来て おなしときには いかてみつらん 日さかたの 月もこよひは もちしほの いり江の波に かげぞみちぬる
金綺楼	ふく風に ただよふ島を 君がため そこなる亀や ささげもつらん 花ひばら とこよの風に ちるつゆや この世のちりを ふきそそぐらん かつらどの この高きやに 月みれば えだもてにをる こちこそすれ
影ふむ橋	おもほえず 月のよころは うかれ出て かけふむはしに ゆきつかへりつ ことならば とみにわすれよ わすれ草 この島山の うらやましさも
見わたしの司	松かぜも 波ものどけき 夕なぎに つりするあまは いつちにけむ 月につけ 雪につけても 見わたしの つかさや人に あまたとはれむ
さし出の崎	夏かわの あしのひと葉の ふねうけて さし出のさきに こよひかもねむ
手向の杜	つよからぬ なさけにこそは なびきけれ たむけのもりに まつるゆふしで みみづくも よき事のみを きかんとて 君がとこよの 蔭したふらん
うきくさの橋	そのむかし いかなる水に さそはれて 根ざしやとめし うきくさの橋
いはずの浦	くちなしの いはずの浦の 山ぶきも ほめではえこそ ゆかれさりけれ とことには うごかぬ園の しつめにと 岩もこころの ありてきにけむ よらず世と さだめぬいしの かめさへも きみがためにと うかびいでけむ
壺墳	おぼつかた まだみちのくは 遠かるに はやまつしまや 近づきぬらん ふりにける むかしの道の 壺墳も うづもれぬ名を ちよにのこさせ
両児嶋	君といつき 父としたひて ふた子島 ふたこころなく なれもつかへよ
三児岩	さざれいしの こけむしそめし みつ子いは 山となるまで 君はましませ
みなし子石	あさゆふに めぐみの波も かかれるを みなしごいしと なにかへだてん
たゆたふ道	春ごとに たゆたふ道の もとぞくら はなのゆきこそ あとはをしけれ
おもかげの砌	ひとしまに ひとしまごとの かげそへて 波もみきはを つくりなしけり わたなかの たつのみやこも おもかげの みざわにうかぶ こちこそすれ
三千代の洞	しつえをば よちんとすれど まぼろしの 手にもさはらぬ からももの花 つきてこし つえもくちにき ももさくや みちよのほらの 花を見るまに
あやおる岸	ふなにそふ 君がそでさへ ひきとめて 波にあやおる あをやぎの原 みそのふの 二もとやなぎ ふたもとと よそにはたえて あらじとそおもふ
下照岡	くれないの したてるをかの 下もみぢ あさ日のかげも さしてそめけり ほのめきて すずしきものは ともしびの 水にうつれる ひかりなりけり
かがみのわだ	あなかしこ にごれるかげの うつりきて きよきかがみの わだにうかばむ かげきよき かがみのわだは もみぢばの ちりつものにぞ 照まさりぬる
はつねばやし	みそのふの 竹のしげみは うぐひすの はつねしめゆふ はやしとぞなる 下かげを たのむといはば かしこきに しづくだにちれ そでにつつまん
夕はえの小軸	よそながら うつしみよとて あらそひの 中をかがみの わだやへだてし くれぬとも しらでぞすぎし 夕ばえの をくきのもみぢ てらすひかりに
詠帰亭	せみのねに 夏もしぐれて なかじまの 波のこなたは あきかぜのふく 波のうち 風のなかなる いほりには うきよのなつも よせぬなりけり
色香山	とめて来し 道もしらかし しるべせよ 春の山ぶみ あきの山ごえ 千世までも あかれぬ花の 色香山 うらやましくも ころそむらん
ゆかりの磯	むらさきの 雲にさきそふ ふちの花 君にめでたき しるしみすらむ よる波は おのかゆかりの いそとてや しのびに花の そでをひくらん
的にはの原	くれないの すそ引をとめ いくたりの あかもをここに かけていにけむ みちのくに 今かの原は あとたえて ここにぞのこる 宮城野の萩 はるごとの 子の日になれし こまつばら 君よりさきに 老となるらん をさまれる 世にもたゆまぬ たつか弓 おとこそたえね まとにはのはら
うまば殿	のりこえて いなきいづる うまばどの たれかこころの いさまざるべき
しるべの汀	さきつとは つけぬものから 梅のはな 香をしるべする きしのはるかぜ
にほふ畝尾	春ごとに にほふうね尾の さくら花 あたりの木々を み山木にして いさな山 いざかすしらず さちあらむ しげきさくらの もりを見るにも
おぼろの淵	なてしこの いわけなげなる すがたをば 神もあはれと 見そなはすらん はる風に うね尾のさくら ちるころは ひるもおぼろの 淵とこそなれ
よるべの石	いはのうへに たたすみかげは 見えねども みたまませばぞ たふとかるらし 神がきの よるべのいしの さざれみづ くみてこそしれ ちばふこころも
葉わけの径	けふよりは 葉わけのみちの すえとほく ちひろあるかげを われもあふがん
千引のはし	かろき身も おもきちびきの いしのはし かけしおもひの すえをとげばや
かずとる濱	君が世の かずとるはまの さざれ石を かぞへてかへる おきつしら波
たか袖がき	たちよれば たがそてがきの うつり香に ひとのこころを あくからすらん
ゆるさぬ門	かたみとて のこれる石の ともしびに あかきこころを かかげてぞ見る

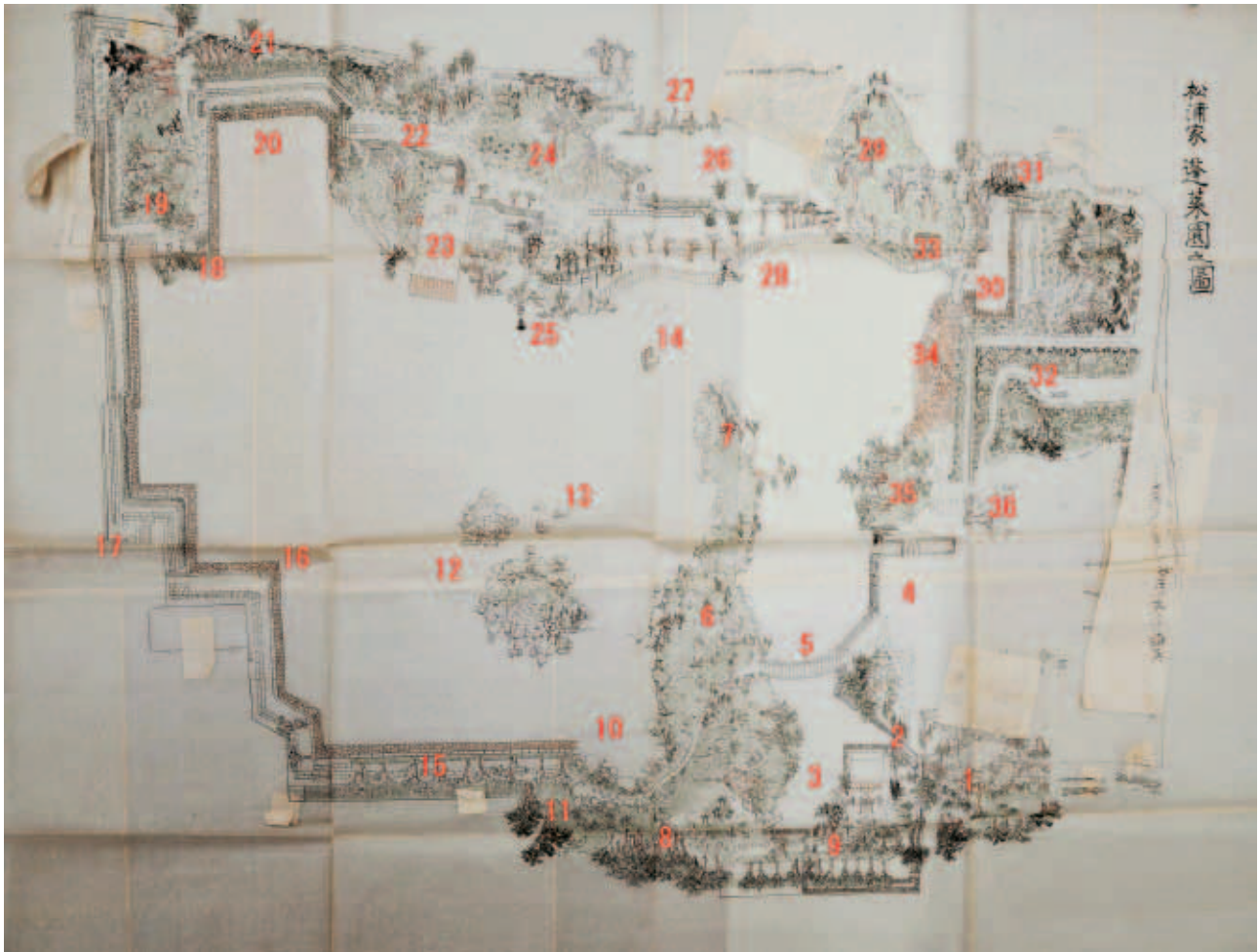


図17.「蓬萊園之図」年代不詳 東京江戸博物館蔵 (63.5×79.5cm)

- 1 岩間の迫門 2 細江の橋 3 望潮の入江 4 金綺楼 5 影ふむ橋 6 見わたしの司 7 さし出の崎 8 手向の杜 9 うきくさの橋 10 いはずの浦
11 壺墳 12 両児嶋 13 三児岩 14 みなし子石 15 たゆたう道 16 おもかげの砌 17 三千代の洞 18 あやおる岸 19 下照岡 20 かがみのわだ
21 はつねばやし 22 夕はえの小岫 23 詠帰亭 24 色香山 25 ゆかりの磯 26 的にはの原 27 うまば殿 28 しるべの汀 29 にほふ畝尾
30 おぼろの淵 31 よるべの石 32 葉わきの径 33 千引のはし 34 かずとる濱 35 たか袖がき 36 ゆるさぬ門

表4.『蓬萊園記』で挙げられた名所・旧跡・地名

岩間の迫門	小田山, 伊豆, 清見ヶ崎, 三保の松原, 浮島ヶ原, 宇土浜, 田平の浦, 遠見, こよろぎの磯, あはの浦
細江の橋	住吉の細江
影ふむ橋	住の江, 三輪山
さし出の崎	笠縫の島, 小津, 伊良子の崎, さし出の磯
いはずの浦	井手の里
壺墳	松島
たゆたふ道	志賀山, 豊初瀬
あやおる岸	六田
かがみのわだ	琵琶湖, 管湖
色香山	白山
ゆかりの磯	垂姫の崎, 田子の浦
的にはの原	宮城野原, 的形
うまば殿	香具山, 荒野, 尾駁, 奥の牧, 桐原, 望月, 信見, 穂坂, 立野牧
しるべの汀	難波津
にほふ畝尾	平戸の浦
よるべの石	天石立神社, 大穴持像石神社, 宿那彦神像石神社, 大洗磯前薬師菩薩神社
かずとる濱	難波津, 淡路島, 小豆島



図18. 岩間の迫門

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治43年(1910) 東京都立忍岡高等学校蔵

表5. 各景の雅名の由来となった和歌

岩間の追門	隼人の 薩摩の追門を 雲居なす 遠くとも吾は 今日見つるかも（万葉集）
細江の橋	遠淡海 引佐細江の みをつくし 我を頼めて あさましものを（万葉集） 住吉の 細江にさせる みをつくし 深きにまけぬ 人はあらじな（詞花和歌集）
望潮の入江	天の原 空ゆく月の 望潮の 満ちにけらしな 難波江の浦（新撰和歌六帖）
金綺楼	孤月當樓滿 寒江動夜扉 委波金不定 照席綺逾依 未缺空山靜 高懸列宿稀 故園松桂發 萬里共清輝（月圓） 月中有河 々水上有桂樹 高五百状（兼名苑）
影ふむ橋	官舍臨江口 灘聲已慣聞 水煙晴吐月 山火夜焼雲 且欲求方士 無心戀史君 異郷那可往 況復久離羣（三體詩）
見わたしの司	あしひきの 山谷越えて 野司に 今は鳴くらむ 鶯の声（万葉集）
さし出の崎	植えずとも 華も及ばなじ 淡路なる 絵島の磯に かかるしら波（按納言長方集） しほの山 さしでの磯に 住む千鳥 君が御代をば 八千代にとぞ鳴く（勅撰和歌集）
手向の杜	手向けには つづりの袖も 切るべきに 紅葉に飽ける 神や返さむ（古今和歌集）
うきくさの橋	侘びぬれば 身を浮き草の 根をたえて 誘ふ水あらば いなむとぞ思ふ（古今和歌集）
いはずの浦	山吹の 花色衣 主や誰 問へど答えず くちなしにして（古今和歌集）
壺墳	陸奥の 言はで忍ぶは えぞ知らぬ 書き尽くしてよ 壺の石ぶみ（新古今和歌集）
両児嶋	次雙生億岐洲與佐度洲 世人或有雙生者象此也（日本書紀）
三兄岩	次生隱岐之三子嶋（古事記）
みなし子石	わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 乾く間もなし（千載和歌集）
たゆたふ道	踏めば惜し 踏までは行かむ 方もなし 心尽くしの 山桜かな（千載和歌集） 天雲の たゆたひ安き 心あらば 我をな頼めぞ 待たば苦しも（万葉集）
おもかげの砌	ちりはけど 積もるは月の 光にて おもかげ分くる 庭の白雪（新統古今和歌集）
三千代の洞	記載なし
あやおる岸	風吹けば 波のあや織る 池水に 糸引きそふる 岸の青柳（玉葉和歌集）
下照岡	日を添ふる 富山の峰の つつじ原 下照る影は 花の色かも（後拾遺集）
かがみのわだ	真十見鏡尔 蜻領巾 負並持而 馬替吾背（万葉集）
はつねばやし	竹をのみ 友と思ひし 我宿に なれてぞ来鳴く 鶯の声（新拾遺和歌集）
夕はえの小岫	武蔵野の 小岫が雉 立ち別れ 去にし宵より 背ろに逢はなふよ（万葉集）
詠帰亭	浴乎沂 風乎舞雩 詠而歸（論語） 松影の 岩井の水を むすびあげて 夏なき年と 思ひけるかな（拾遺集）
色香山	記載なし
ゆかりの磯	紫の ひともとゆえに 武蔵野の 草はみながら あはれとぞみる（古今和歌集） 紫の ゆかりの原に 藤の花 かかれる雲も 睦ましきかな（金葉和歌集） 懐かしき 色のゆかりを 思ふにも 見れば心に かかる藤波（千五百番歌合）
的にはの原	記載なし
うまば殿	記載なし
しるべの汀	梅の花 にほひを道の しるべにて あるじも知らぬ 宿に来にけり（詞花和歌集） 梅の花 風のしるべの 春をとめて ゆくべき里ぞ とはでくれぬる（為家集）
にほふ畝尾	神坐香山之畝尾木本名泣澤女神（古事記）
おぼろの淵	仲氏任只 其心塞淵 終温且恵 淑慎其身 先君之思 以勗寡人（詩経） 散りかかる 花にぞ曇る 大原や 月もおぼろの 清水なれとて（順徳院御百首）
よるべの石	記載なし
葉わけの径	記載なし
千引のはし	伊弉諾尊 已至泉津平坂 故便以千人所引磐石 塞其坂路（日本書紀）
かずとる濱	わたつ海の 濱の真砂を 数えつつ 君が千歳の あり数にせん（古今和歌集）
たか袖がき	色よりも 香こそあはれと おもほゆれ たが袖ふれし 宿の梅ぞも（古今和歌集） たが袖の なごりをとめて 立つ花の 昔変わらぬ 香に匂ふらむ（新拾遺和歌集） 雲かかる 峰の松垣 あれにけり 世をのれこしと 年や経ぬらん（遠所御歌合） 松垣の 枯葉にかかる つたかずら 是も緑の 色に変はれる（禪林百首）
ゆるさぬ門	記載なし

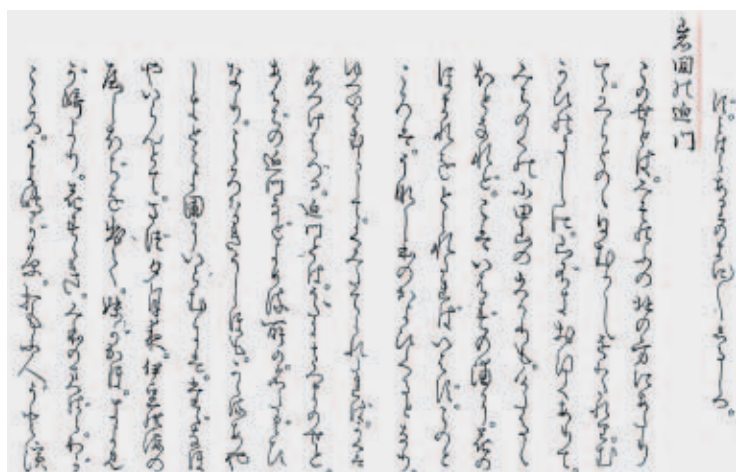


図19. 岩間の迫門の記述

『蓬萊園記 上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

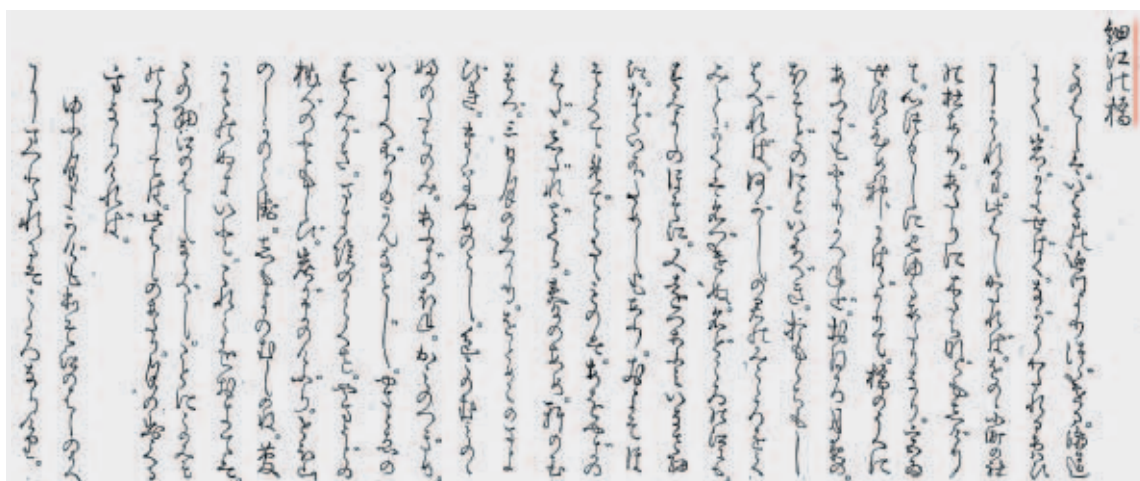


図20. 細江の橋の記述 『蓬萊園記 上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

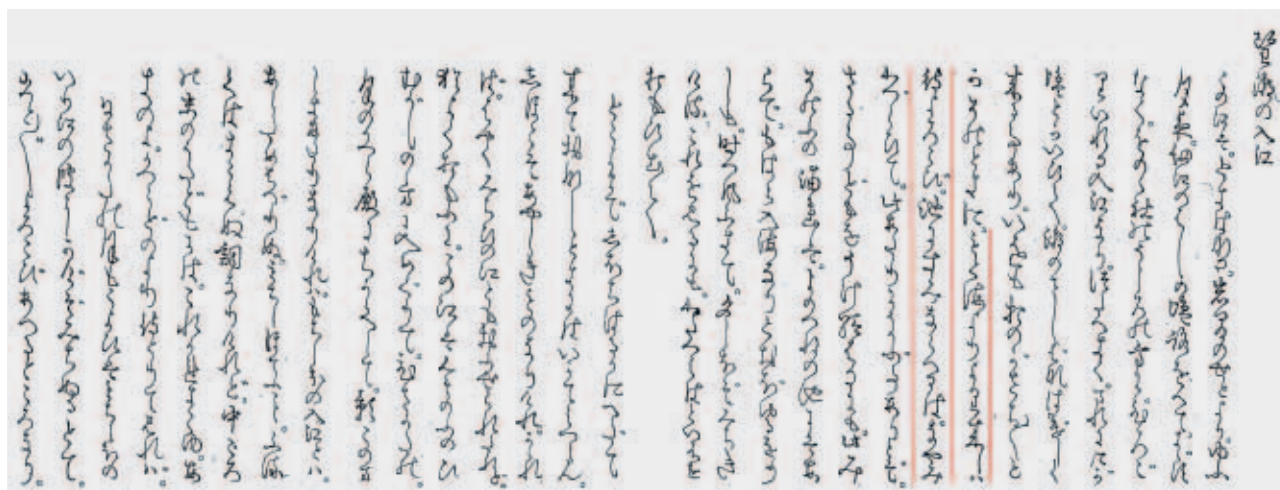


図21. 望潮の入江の記述 『蓬萊園記 上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

を取込むために設けられた、園内北から「金綺楼」の東側まで延びる細長い水路である(図17-1)。万葉集(表5)で詠まれた「迫門」の文字を当て、雅名となった¹⁾(図19)。

(2) 細江の橋

「岩間の迫門」から続く流れに「細江の橋」が架けられていた(図17-2)。周辺は狭く、石垣が巡らされた細い道が橋の上を通る様子が、源氏物語の光源氏と朧月夜が出会う細殿に見立てられたことに加え、「細江」という言葉が詠まれた和歌2首(表5)にちなんで、雅名となった¹⁾。園内の東に位置するため、月の観賞に適することが記されている¹⁾(図20)。

(3) 望潮の入江

「岩間の迫門」から「細江の橋」を経て、小野小町の杜の背後まで広がる入り江である(図17-3)。隣



図22. 金綺楼

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治44年(1911) 東京都立忍岡高等学校蔵

接する「金綺楼」を中心とする景観の良さが賞嘆された¹⁾。干満が見られることから、既に雅名が「みちひ(満ち引き)の江」と付けられており、潮が満ちる様を詠んだ和歌(表5)の語句「望潮」を当てて雅名となった¹⁾。このほか、時折激しく海水が流入することがあり、池泉の淡水魚が影響を受けたことも記されている¹⁾(図21)。

(4) 金綺楼

「金綺楼」(図22)は、池泉北岸にある高殿で(図17-4)、儒者・林述斎が杜甫の律詩の対句(表5)を並列させて雅名とした¹⁾(図23)。松浦熙の父・清によって造成され、文化3年(1806)の大火で消失した。文政9年(1826)には松浦清が金綺楼亡失を「旧懷に堪えず」と言及し³⁾(図24)、天保5年(1834)の「蓬萊園之図」には、「金綺楼」が描かれていることから、この間に再建されたと考えられる。月を鑑賞するのにふさわしい場所で、別名「かつらどの」と呼称された¹⁾(図25)。藤原長富筆、佐藤一齊跋文の「深樾隔塵」という扁額が、同所に掲げられたことが明らかとなった。また、花山院大納言愛徳筆の「仙邇日月開」という書もあった¹⁾(図26)。

このほか、楼内の西の壁に諸大名20人分の扁額、南の壁に公家24人分の扁額が掲げられ、欄間は四季と花鳥が彫り込まれ、松浦熙の次男・啓の作画や中国の著名な画家の作品も飾られた。茶室においては鎮信流の茶会が興じられ、丸筒形の茶器を使用し、道具類には全て「金綺常什」の銘が入れられていた。そして室内には持明院基延卿筆「金綺茶室」の扁額が架けられたことが明らかとなった¹⁾(図27)。

(5) 影ふむ橋

「金綺楼」と中島の間(図17-5)に架かる幅が広い反橋で、月夜に影を踏みながら橋を行き来する様子が雅名となった。水面に映った橋から月が吐き出されるように昇る様が、漢詩の一節(表5)に類似していたことから、別名「吐月橋」と付けられた¹⁾(図28)。また、



図23. 雅名に関する記述

『蓬萊園記 艸』天保5年(1834) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

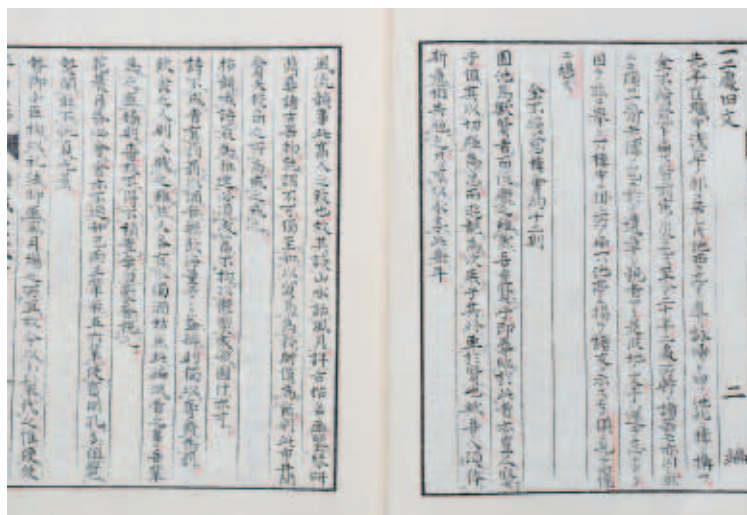


図24. 「旧懷に堪えず」と言及している記述

『甲子夜話』文政4年(1821)～天保12年(1841)第72巻 松浦史料博物館蔵(26.5×19cm)

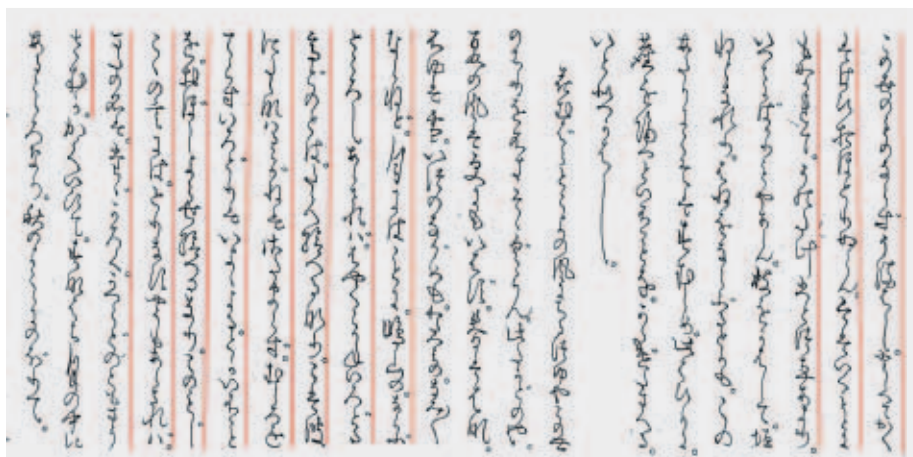


図25. 別名「かつらどの」の由来についての記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

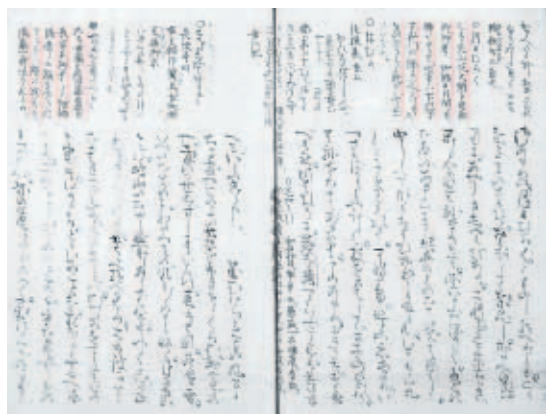


図26. 金綺樓内に掲げられた扁額と書の記述

『蓬萊園記 艸』天保5年(1834) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

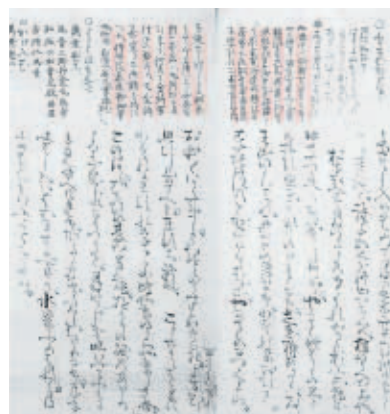


図27. 金綺樓に掲げられた扁額の記述

『蓬萊園記 艸』天保5年(1834) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

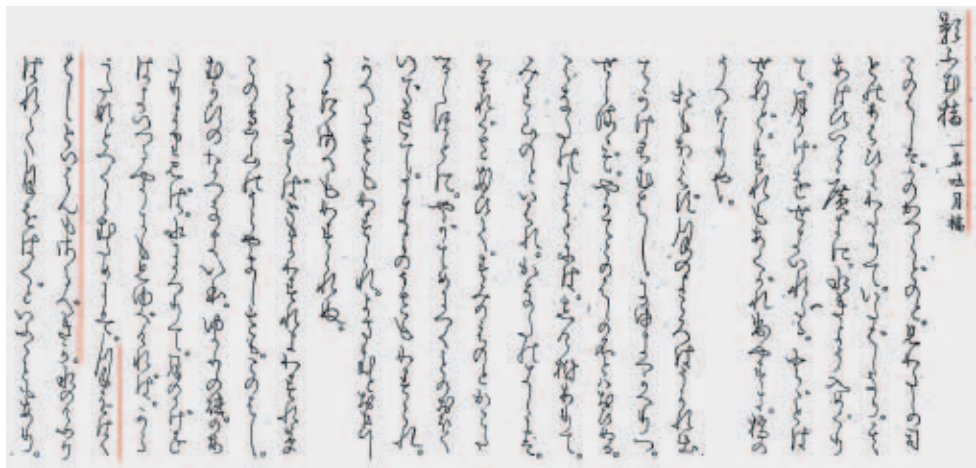


図28. 影ふむ橋の記述 『蓬萊園記上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

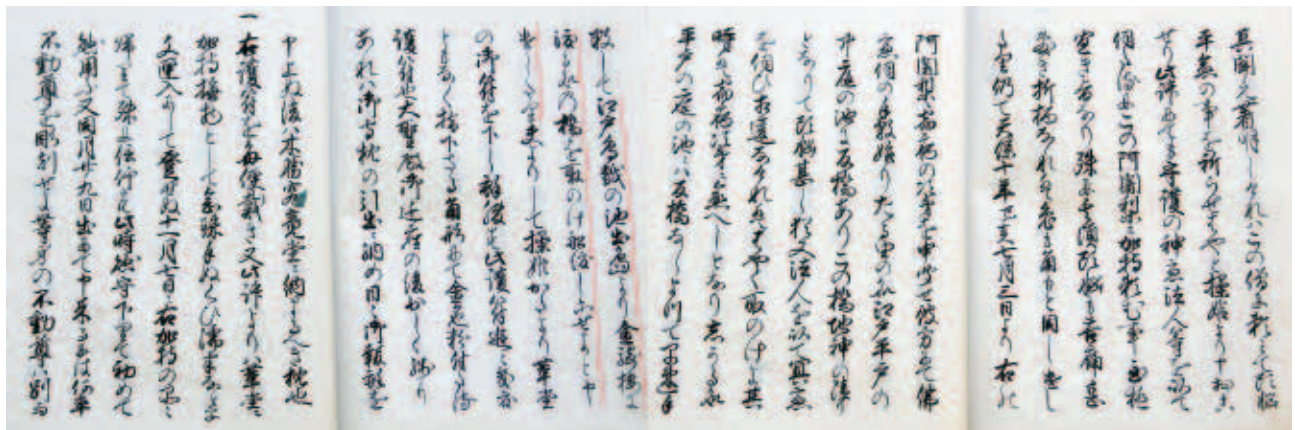


図29. 反り橋（影ふむ橋）に関する記述『亀岡随筆』天保4年（1833）～安政5年（1858）第5巻 松浦史料博物館蔵（29×18cm）

表6. 『蓬萊園記』に記載されている植物

岩間の追門	山吹
金綺楼	薔薇
影ふむ橋	忘れ草
見わたしの司	松
さし出の崎	松
手向の杜	榎木
うきくさの橋	浮き草
いはずの浦	山吹
壺墳	榎木
たゆたふ道	桜
三千代の洞	桃
あやおる岸	柳
下照岡	常緑樹、桜、つつじ、紅葉
はつねばやし	常緑樹、小竹、銀杏
夕はえの小岬	つつじ、紅葉
色香山	松、白樺、桜
ゆかりの磯	藤
的にはの原	桜、木瓜、萩
しるべの汀	梅
にほふ畝尾	桜
おぼろの淵	撫子、梅、卯木
葉わけの径	竹
たか袖がき	芳香樹

橋のたもとには忘れ草が多く植栽されていた¹⁾ (表6)。

松浦熙が患う頭悩の治癒のため、娘である秀姫が阿闍梨に祈祷を依頼したところ、「江戸の庭中にある反り橋が地神の障りとなる」という助言をされたため、蓬萊園にある反り橋「影ふむ橋」を撤去し、船渡しとした記録が残っている²⁾ (図29)。文化9年(1812)の「鳥越邸之図」には描かれているが、明治申年の「鳥越邸之図」には、この橋は描かれていない。その違いを図30と図31で示した。

(6) 見わたしの^{つかさ}司

古木や巖に囲まれた中島の一つで (図17-6)、周辺より小高いため、園内を一望することが出来た¹⁾。和歌で高い所を「司」と詠む例 (表5) をふまえ、雅名となった¹⁾ (図32)。

(7) さし出^での崎

「さし出の崎」(図33)は、見わたしの司から続く中島で、池の中に細長く差し出ている (図17-7)。植栽された松の風景が賞嘆され、明治期頃の写真には、絵図面で描かれている松も確認できる。和歌 (表5)



図30.「鳥越邸之図」

文化9年(1812) 松浦史料博物館蔵(133×203cm)

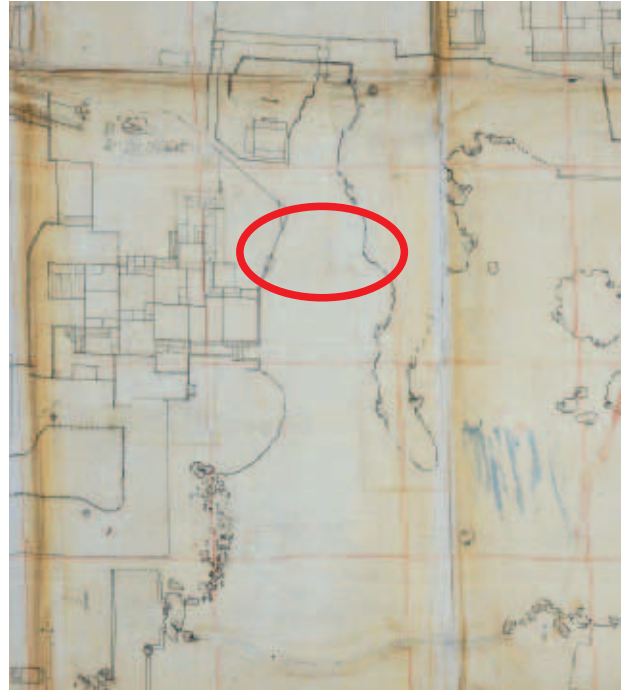


図31.「鳥越邸之図」

明治申年 松浦史料博物館蔵(148×191cm)

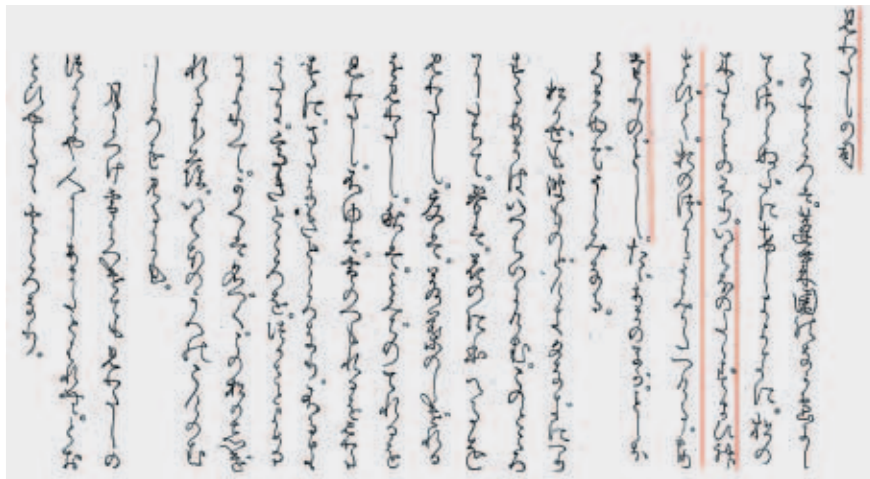


図32. 見わたしの司の記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

の描写のように、岸辺の岩に打ち寄せる波が、碎けて華を咲かせる様が美しいとされ、「潮の山」と呼称されていた¹⁾(図34)。この語句が「さしでの磯」を主題とした和歌(表5)に多く詠まれることをふまえ、雅名となった¹⁾。

(8) 手向の杜

「手向の杜」(図35)は、いはずの浦から小野小町の社の瑞垣まで広がる杜(図17-8)で、古来より手向の杜と称された(図36)。若枝、紅葉、雪など、各季節の趣を供え物に見立て、木の枝がこれらを手向ける様相と

されていた¹⁾。橘守部は雅名をそのまま用い、植物を手向け物に見立てる例として、和歌を挙げた(表5)。社は古来において周辺住民によって参拝され、強飯を奉納する決まりがあったことが記されている¹⁾(図37)。

(9) うきくさの橋

小野小町の社前の細い水路に架けられた橋である(図17-9)。周囲に浮き草が繁茂すること、自身を浮き草に喩えた小野小町の和歌(表5)を想起させることから、雅名となった¹⁾(図38)。



図33. さし出の崎

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治43年(1910) 東京都立忍岡高等学校蔵



図35. 手向の杜

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治44年(1911) 東京都立忍岡高等学校蔵



図34. さし出の崎の記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵 (26×18.5cm)

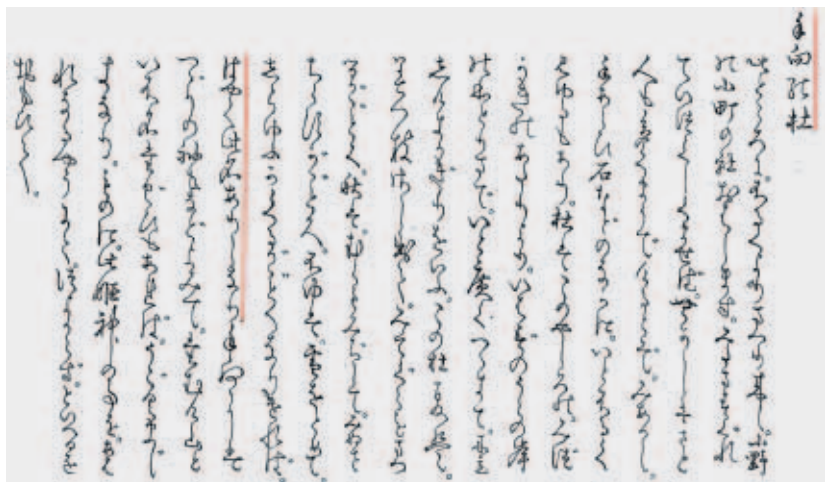


図36. 手向の杜の記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵 (26×18.5cm)

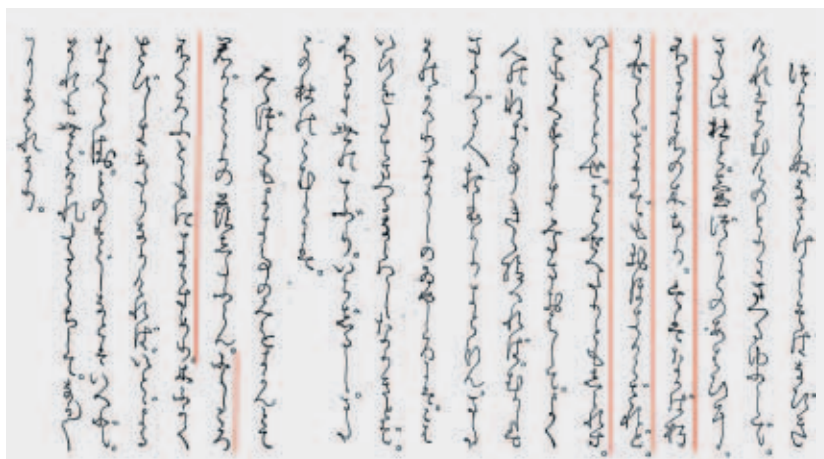


図37. 強飯を奉納していた記述
『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

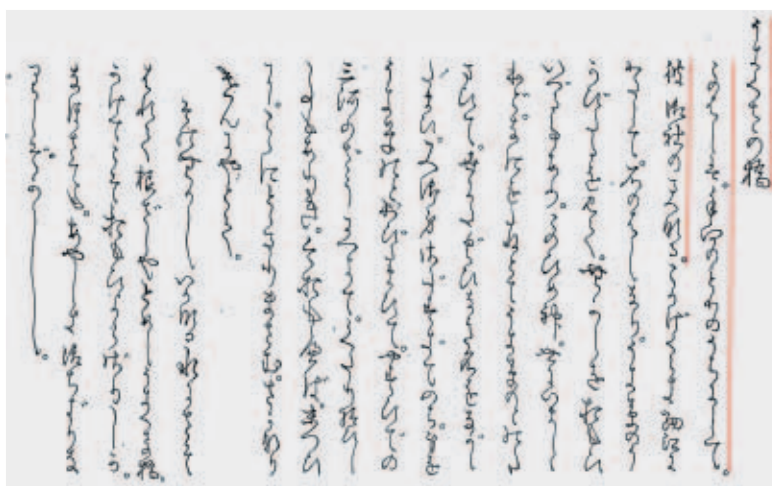


図38. うきくさの橋の記述
『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

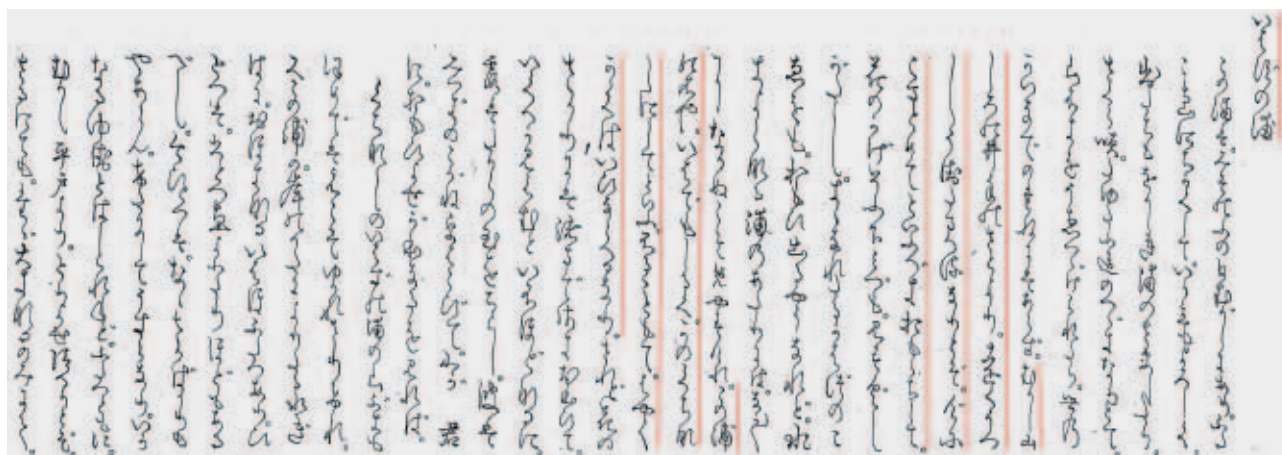


図39. いはずの浦の記述 『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

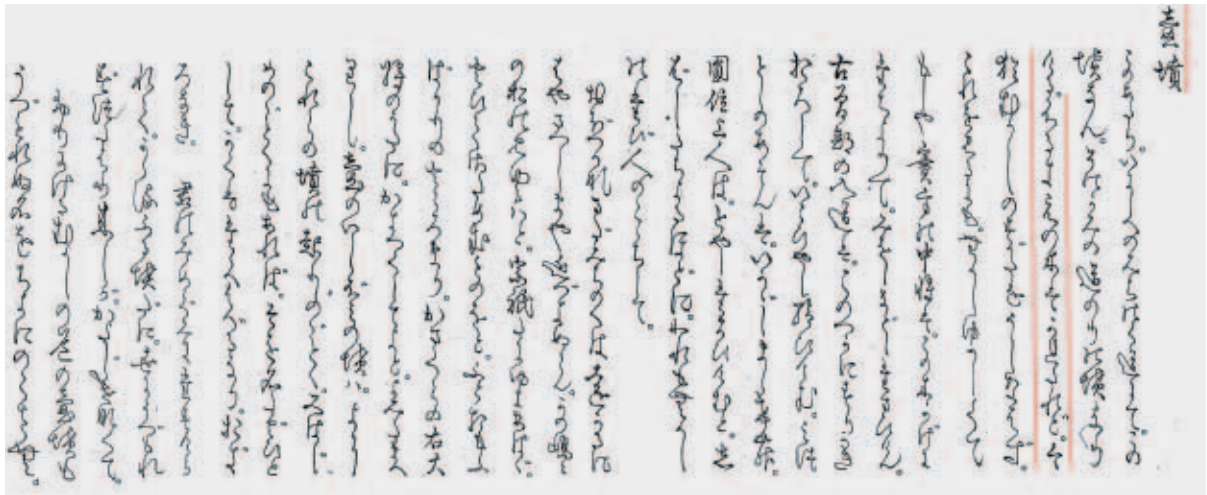


図40. 壺墳の記述 『蓬萊園記上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

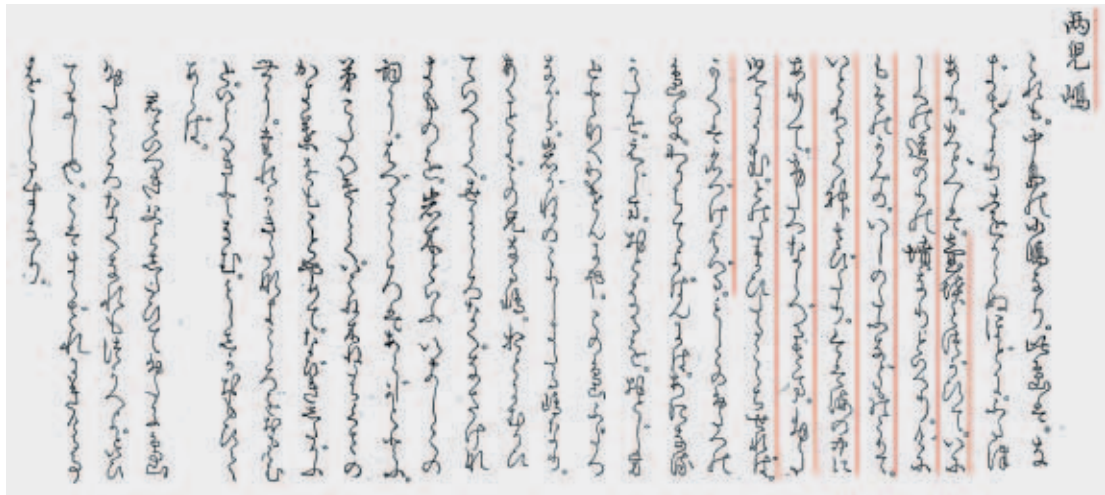


図41. 両児嶋の記述

『蓬萊園記上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

(10) いはずの浦^{うら}

「たゆたふ道」の続きにあり（図17-10），古くから「いはずの浦」とよばれた¹⁾（図39）。花から滴る露が磯にこぼれる様，波に反射する山吹の色が賞嘆された¹⁾。和歌（表5）の情景をかけて，既に同雅名が付けられていたことがわかった¹⁾。

(11) 壺墳^{つぼつか}

「いはずの浦」の背面にあり（図17-11），江戸開府以前は，鳥越邸の場所に陸奥への街道が通っており，壺墳が池の中島と対をなす一里塚であったことが記されていた¹⁾。また，枯れた榎木が古墳の上に生え，古墳のたたずまいは今なお，その雰囲気を出していないと記されている¹⁾（図40）。橋守部が「壺の碑（つぼのいしぶみ）」を想起したことに加え，同碑が和歌に多く詠まれていること（表5）から，雅名となった¹⁾。

(12) 両児嶋^{ふたごしま}

「いはずの浦」の向かいに浮かぶ大小の中島で（図17-12），日本書記の「伊弉諾・伊弉冉が双子の島（佐渡島）を生んだ」という一節（表5）をふまえ，雅名となった¹⁾。片方は壺墳の片割れであるといわれている¹⁾（図41）。大小それぞれ「兄島」「弟島」と称され，兄弟に見立てて観賞された¹⁾。

(13) 三児岩^{みつごいわ}

「両児嶋」に隣接する三つの岩で（図17-13），古事記の「伊弉諾・伊弉冉が三つ子の島（隠岐島）を生んだ」という一節（表5）をふまえ，雅名となった¹⁾（図42）。橋守部は三児岩を細石が苔むす様子に見立て，熙の健勝を願い，「さざれいし こけむしそめし みつごいわ 山となるまで 君はましませ（さざれ石のように，この三児岩が苔むし，山となるその日まで，上様よい つまでもご健在でいらっしゃってください）」¹⁾と記し

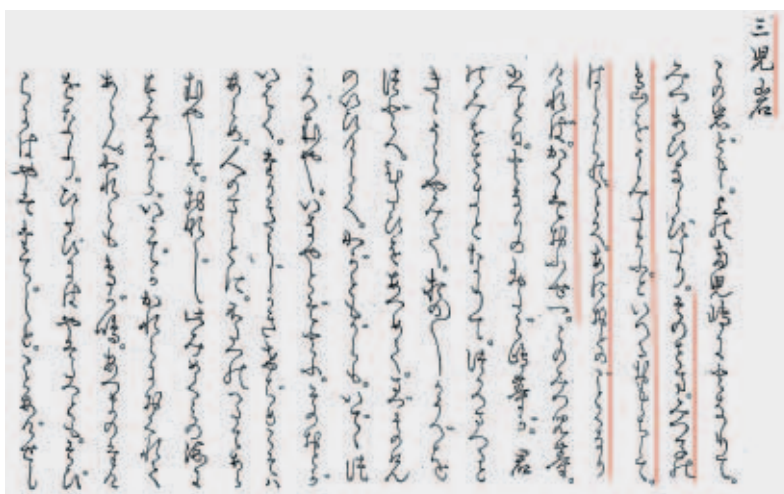


図42. 三児岩の記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

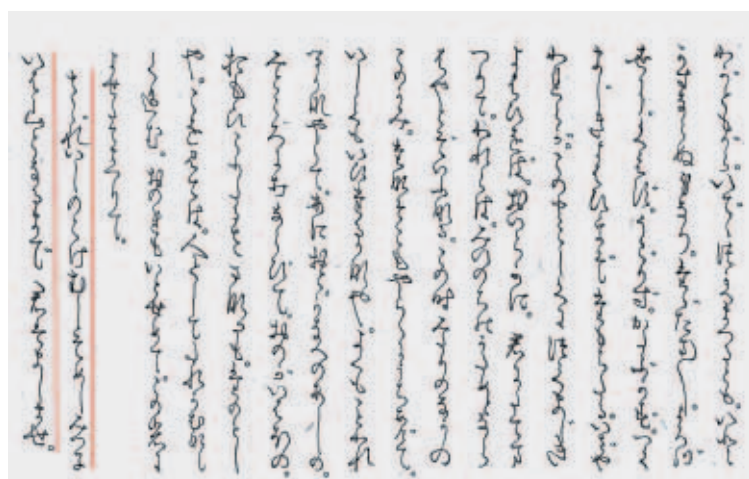


図43. 橋守部が熙の健勝を祝い詠んだ詩

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)

ている(図43)。

(14) みなし^{こいし}子石

「ゆかりの磯」付近の池の中にある石で(図17-14),ほかの岩から孤立していることに加え,絶えず波に洗われる様子が和歌(表5)の情景と類似していたことから雅名が付けられた¹⁾(図44)。

(15) たゆた^{みち}ふ道

本宅から「金綺楼」に通うための道で(図17-15),先代からこの道に沿って桜が植栽され続けた¹⁾(図45)。このため,滋賀にある桜の名所と比較され(表4),開花前から散り始めまで各光景が鑑賞された¹⁾。その美しさで心が揺れ動く様が,和歌に詠まれた情景(表5)に類似することをふまえ,雅名となった¹⁾。

(16) おもかげ^{みざり}の砌

「たゆたふ道」から西へ曲がった所にある砌で(図17-16),池を挟んで「金綺楼」と対面している。このため,砌から正面を眺望すると,「金綺楼」が水面より突如としてそびえ立ち,絵画のような風景である¹⁾と記されている(図46)。また,月の光が降り注いで地面が輝いて雪が降り積もっているように見えたりと様々な幻影が見えるため,和歌(表5)の情景と類似していたことから,雅名がつけられた¹⁾。この砌における眺望が良く,特に池泉周辺を中心とした各景を賞嘆するのに最適な場所であったことがわかる。

(17) 三千代^{みちよほら}の洞

大殿と池を結ぶ通路として使われた洞状の道で(図17-17),出入口辺りには桃が植栽されていた¹⁾(図47)。橋守部はこの洞を桃源郷に見立て,古歌に桃源郷を「三千代」と詠む事例が多いことから雅名となっ

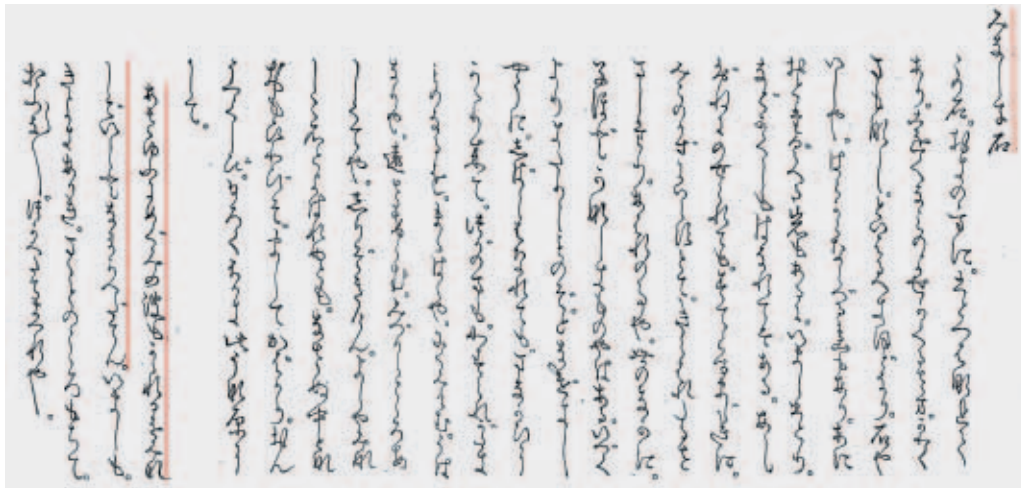


図44. みなし子石の記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵 (26×18.5cm)

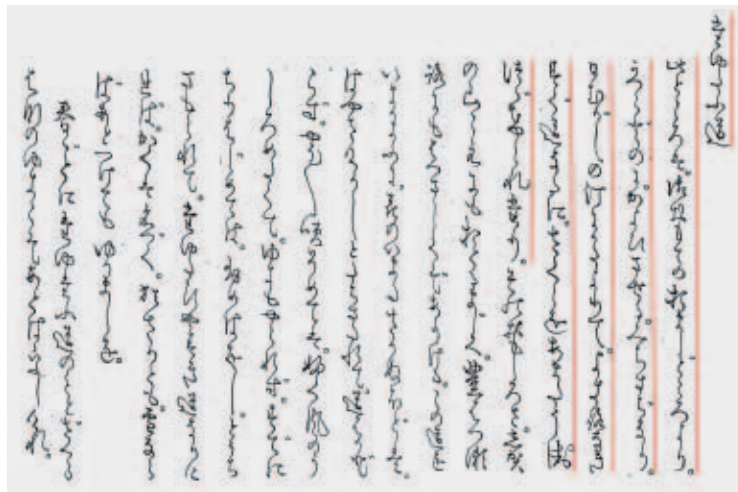


図45. たゆたふ道の記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵 (26×18.5cm)

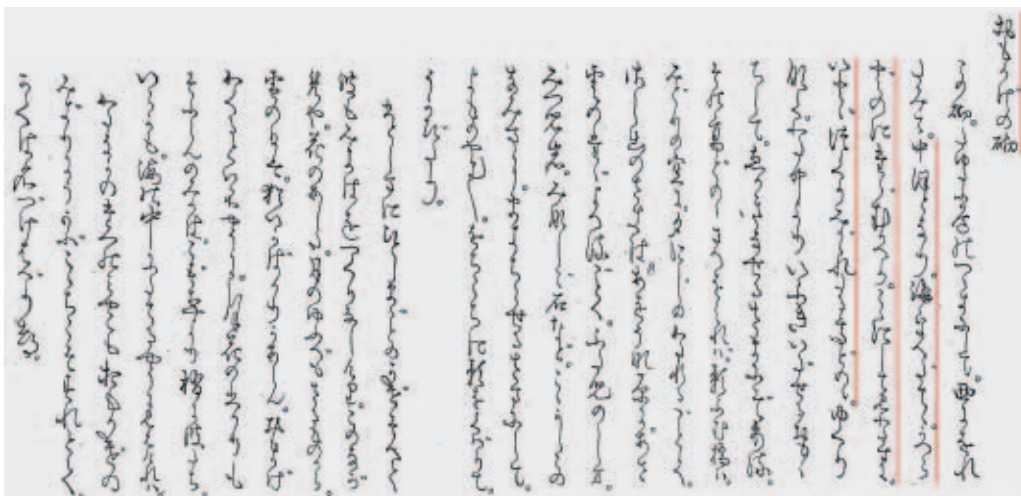


図46. おもかげの砌の記述

『蓬萊園記 上』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵 (26×18.5cm)

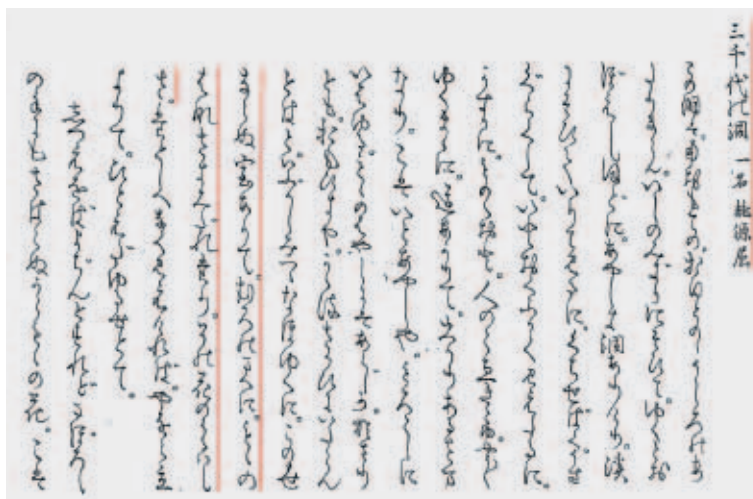


図47. 三千代の洞の植栽に関する記述

『蓬萊園記上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）



図48. 三千代の洞の記述

『蓬萊園記上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）



図49. あやおる岸

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治43年（1910） 東京都立忍岡高等学校蔵

た¹⁾ (図48)。**(18) あやおる^{きし}岸**

「あやおる岸」(図49)は、かがみのわだ付近にある船着き場で(図17-18)、水際に降りる階段の側らに柳の古木が植栽された¹⁾(図50)。枝が風になびき、波立った水模様と交わる様を、和歌(表5)の情景にかけ、雅名となった¹⁾。また、柳の名所・六田(現:奈良県吉野郡)に勝る柳である¹⁾と記されている。

(19) ^{したてるおか}下照岡

「あやおる岸」から続き(図17-19)、岡下に桜、つつじ、紅葉の植栽、背景に常緑樹が茂っていた¹⁾(図51)。このため開花時期になると、各植栽の鮮やかさと常緑樹の黒色が、くっきりとした明暗を成して賞嘆されたことが記されている¹⁾。特に、紅葉の植栽が最

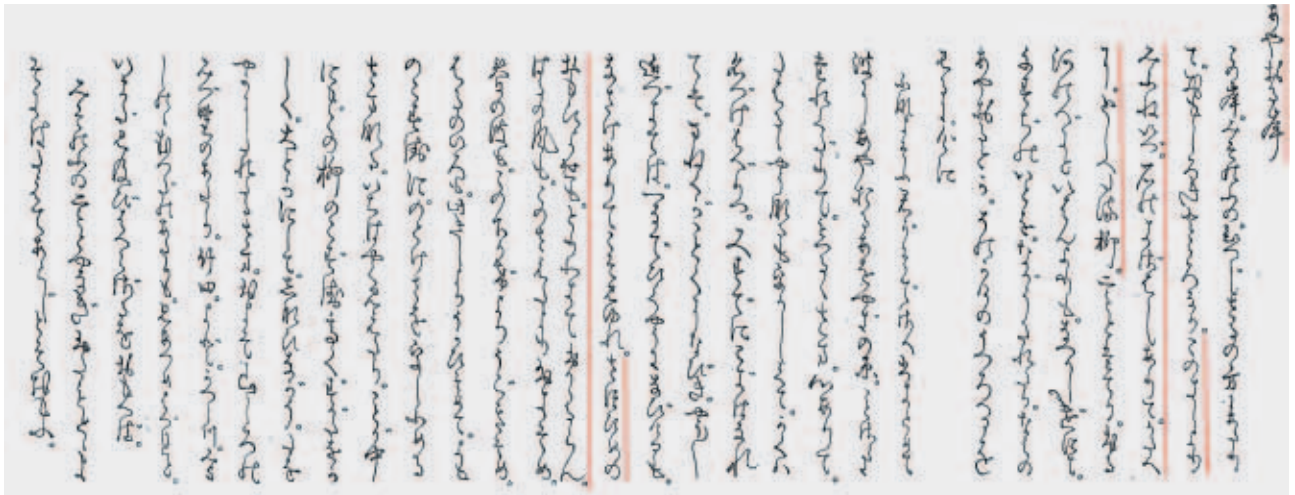


図50. あやおの岸の記述 『蓬萊園記 上』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

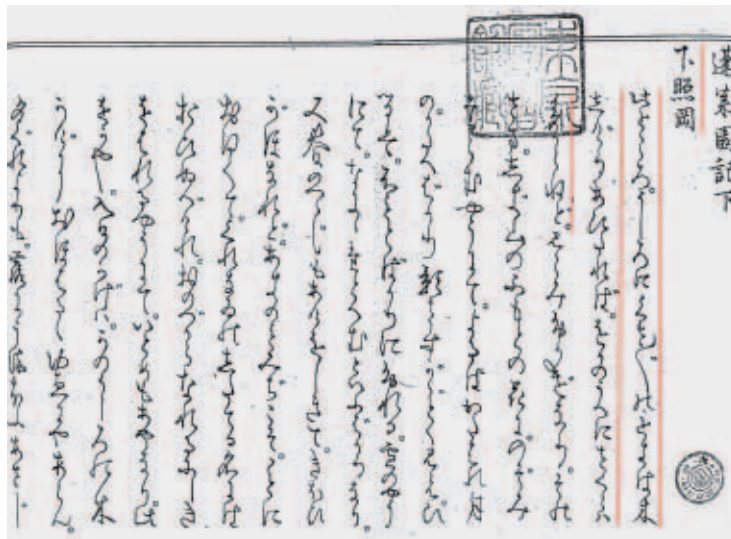


図51. 下照岡の記述
『蓬萊園記 下』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

も多いため、地面に照り返る色彩の様子が、和歌（表5）の情景とかけられて雅名となった¹⁾。

(20) かがみのわだ

「夕はえの小岫」と「下照岡」の間に流れ込む湾曲した入り江で（図17-20）、池の清水が鏡に見立てられた¹⁾（図52）。秋になると、水面に両側の紅葉が映り込み、鏡に錦の布をかけたような光景が、長歌の場面（表5）に喩えられ雅名となった¹⁾。

(21) はつねばやし

自然に生えそろった小竹の林である（図17-21）。鶯が毎春飛来し、同所で初鳴きを聞ける様子に和歌（表5）の情景がかけられ、雅名となった¹⁾。この側らに銀杏が植栽されていたが、庭園完成初期に火災により焼失したと記されていた¹⁾（図53）。

(22) 夕はえの小岫

「かがみのわだ」を間に挟み、「下照岡」の並びにある（図17-22）。つつじと紅葉が植栽され、対岸の「下照岡」と共に観賞されたほか、「詠婦亭」の待合東屋が設けられた¹⁾（図54）。小岫に「詠婦亭」、東屋が添えられた景色は、夕映えの色を際立たせることに加え、丘のように高い所を意味する語句として「小岫」が用いられた和歌（表5）の例を挙げ、雅名となった¹⁾。

(23) 詠婦亭

「詠婦亭」（図55）は泉水西岸にあり（図17-23）、床が池上に望むように架けられている。このため、夏期においては、水面を渡る風が吹き込み、園内で最も涼しい場所として親しまれた¹⁾（図56）。内部に茶室が設けられ、客人に供される蒸し菓子および作り菓子はすべて、花や紅葉をかたどったものであったことが

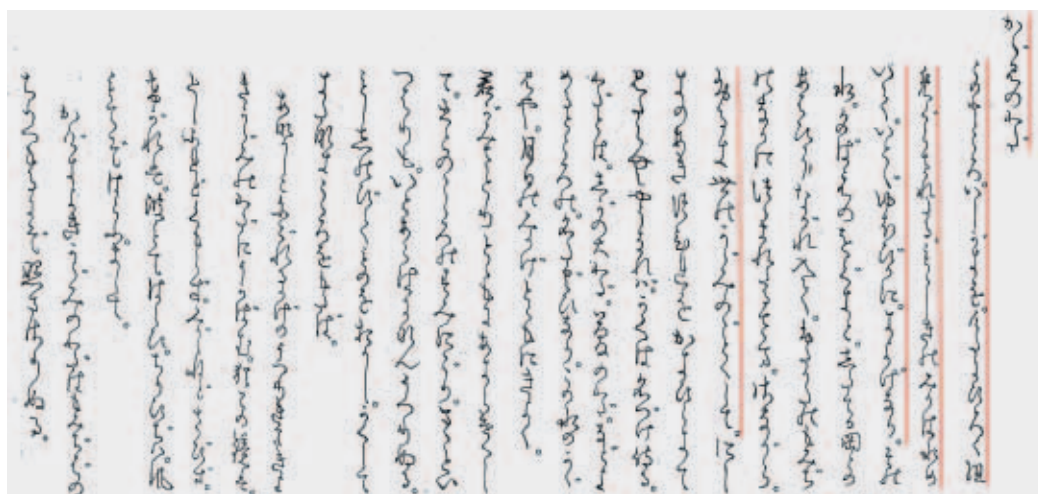


図52. かがみのわだの記述

『蓬萊園記下』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

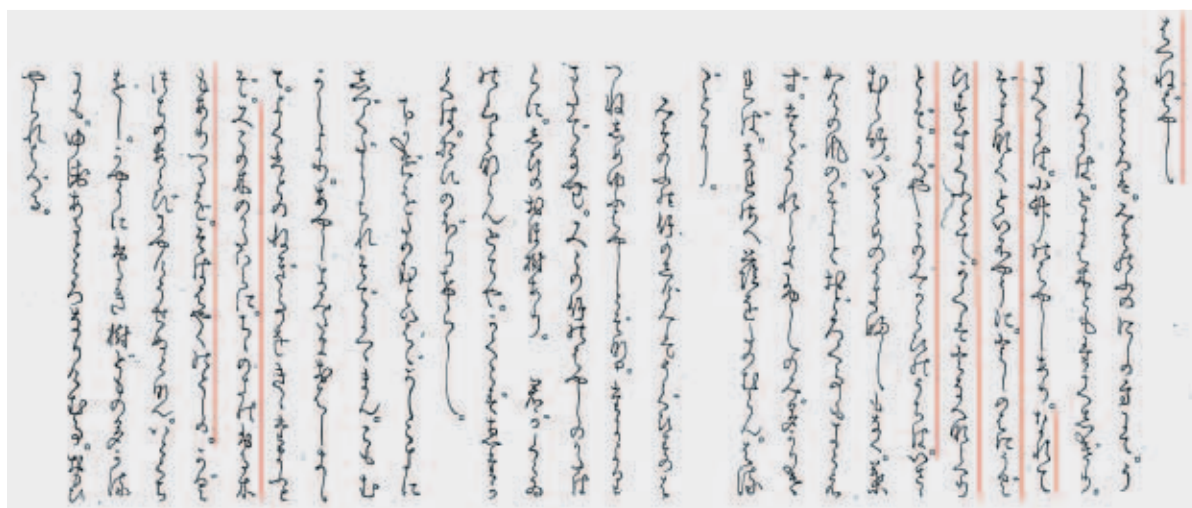


図53. はつねばやしの記述

『蓬萊園記下』明治24年（1891） 国立国会図書館蔵（26×18.5cm）

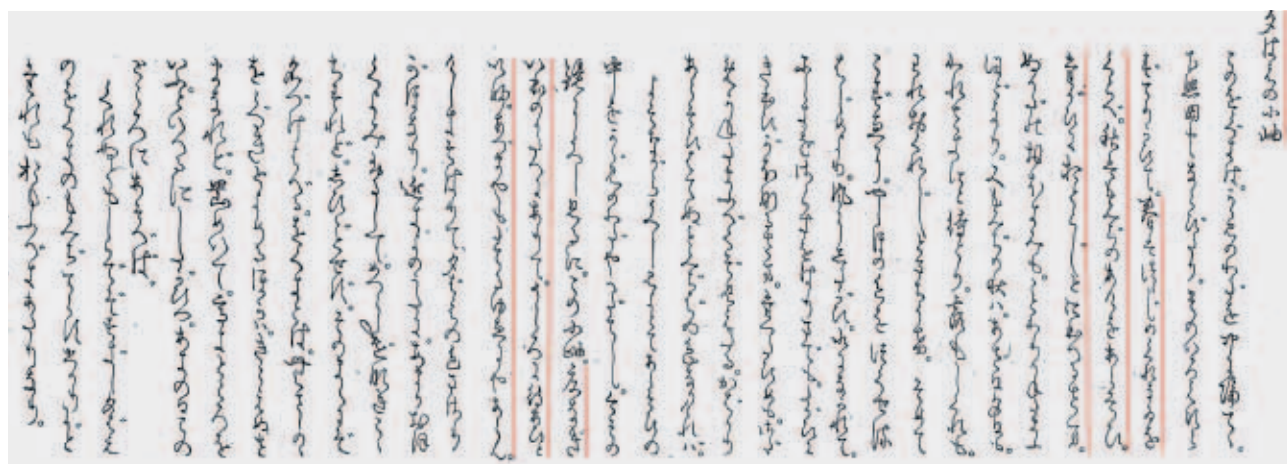


図54. 夕映えの小岫の記述 『蓬萊園記下』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26×18.5cm)



図 55. 詠帰亭門

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治 43 年(1910) 東京都立忍岡高等学校蔵

わかった¹⁾。諸侯の来訪もあり、この際、松平定信が「歌を詠いながら帰る」という論語の一節(表5)にちなみ、庵の雅名を「詠帰亭」と定めた¹⁾。徳川治保は庵の景色を賞賛して「麗景清漪」という扁額を、源治寶は「鏗爾」という扁額を贈った¹⁾(図57)。また、客人の一人が庵の涼しさに対し、和歌(表5)に詠まれた情景のように「この庵においては、まるで夏が無いようだ」と評したことから、別名「夏なきいほ」と付けられた¹⁾(図58)。『甲子夜話』によると、文化3年(1806)の大火で同亭は消失したが、文化9年(1812)の「鳥越邸之図」に詠帰亭が描かれていることから、この時までには再建されたものと思われる。

(24) ^{いろかやま}色香山

「詠帰亭」の後方にあり(図17-24)、園内一高い山である。峰には松、白樺、桜など、種々の樹木が見ら

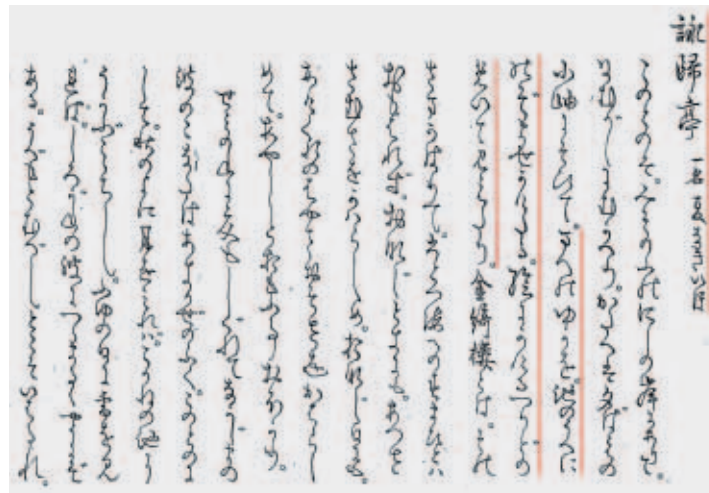


図 56. 詠帰亭の記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)



図 57. 詠帰亭内の扁額に関する記述 『蓬萊園記 艸』天保 5 年(1834) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

れた¹⁾。特に桜の植栽が多く、開花期は、花に香りが無ければ雪と間違ふほど、一面白く染まった光景であると記され(図59)、これが由来となって既に同雅名が付けられていた¹⁾。

(25) ゆかりの磯^{いそ}

「詠帰亭」の坪庭に続く磯である(図17-25)。立石などが大小多数あり、藤棚も架けられていたことがわかった¹⁾(図60)。「藤花が一輪あるだけで、武蔵野原に生えている他の草すべてが、藤花の縁者と思えて愛おしい」という和歌(表5)になぞらえ、磯を藤の縁者と見立てたことに加え、藤を題材にした和歌(表5)に「ゆかり」という語が多く用いられたことから、既に同雅名が付けられていた¹⁾。

(26) 的に^まには^との原^{はら}

「色香山」の北麓から「にほふ畝尾」の前まで続く広い原である(図17-26)。中を隔てて桜、木瓜の群植、

萩の植栽が見られた¹⁾(図61)。このほか松原もあり、中の広地に的場が設けられた¹⁾。夕方の集いや雪月の宴の時など、常に弓術が行われたことが記されており、的弓、賭弓などが興じられたことから、雅名となった¹⁾(図62)。

(27) うまば^{どの}殿

南北に延びる馬場(うまば)と、その中間地点に造成された殿にちなみ、雅名となった(図17-27)。松浦熙をはじめ、多くの住人が訓練を行い、来客者に披露することもあった¹⁾。陸奥(現:青森県、岩手県、宮城県、福島県、秋田県の一部)の荒野、尾駁、奥の牧、信濃(現:長野県)の桐原、望月、甲斐(現:山梨県)の信見、穂坂、武蔵(現:東京都、埼玉県、神奈川県の一部)の立野牧など、現在の東北地方を中心に、関東および中部地方といった様々な馬産地から馬を導入したことが明らかとなった¹⁾(図63)。

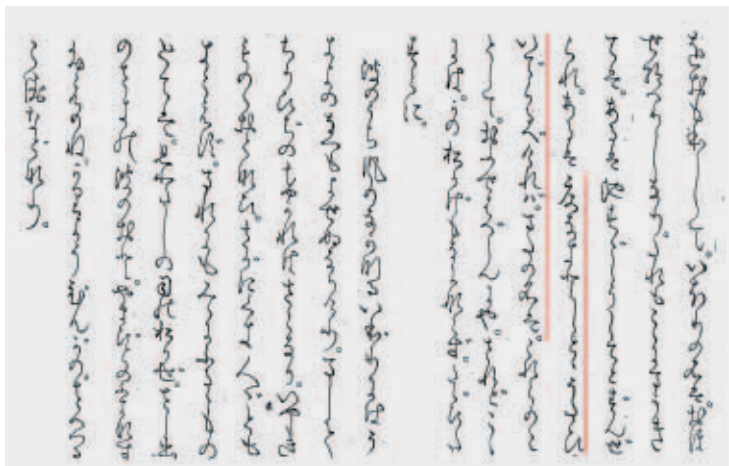


図 58. 別名「夏なきいほ」の由来に関する記述
『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

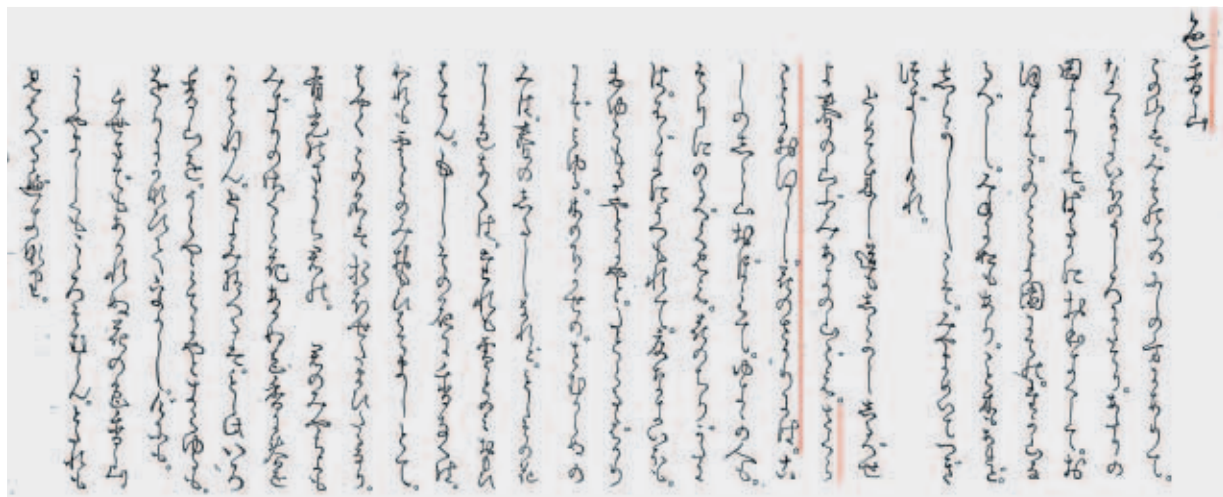


図 59. 色香山の記述 『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

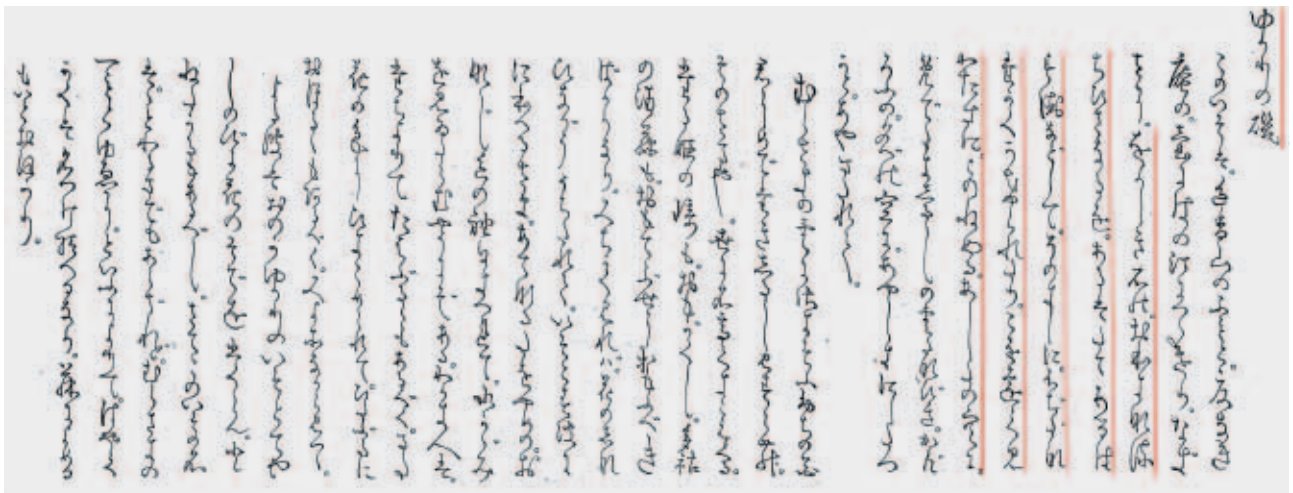


図 60. ゆかりの磯の記述 『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

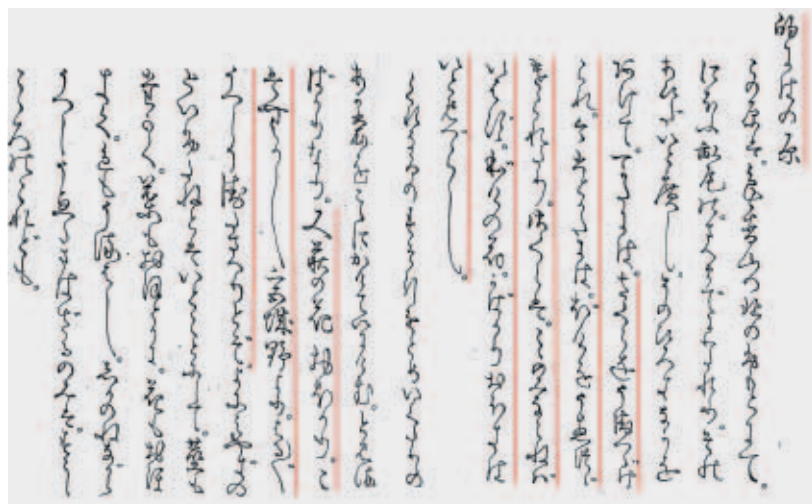


図 61. 的にはの原の植栽に関する記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

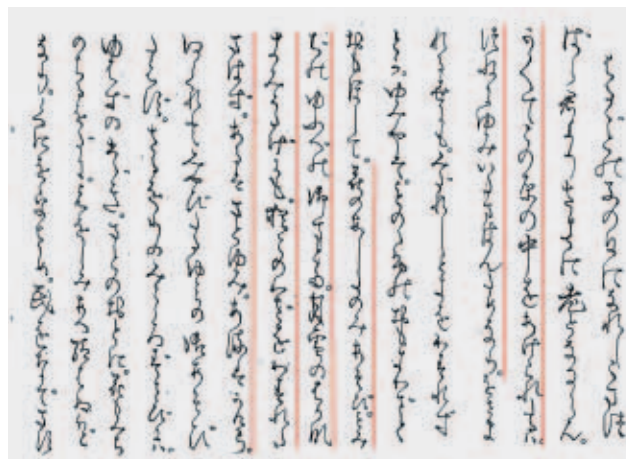


図 62. 弓術が行われていた記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

(28) しるべの汀^{みぎわ}

「的にはの原」から続く岸辺に位置する（図17-28）。汀沿いに列植された梅は、庭園造成当初に移植された樹齢二百年以上の古木であることがわかった¹⁾。ほかにも、橘が植栽されていたこともわかった¹⁾。香りが強い樹種がまとめて植栽され、和歌（表5）にも表現されているように、春の訪れや蕾が開く時期、花びらが散る時期を芳香によって知ることができることから、雅名となった¹⁾（図64）。

(29) にほふ畝尾^{うねお}

「的にはの原」と「塞淵の祠」との間にある離れ山で（図17-29）、桜が群植された。「にほふ」は、美しさにあふれているという意味の古語で、うねりのある山裾にかけて桜が優美に咲き誇る光景に由来して付けられた¹⁾。また、「畝尾」は、古事記（表5）に「香山之畝尾」と出

てくるのに倣って付けられた¹⁾（図65）。

(30) おぼろの淵^{ふち}

「にはふ畝尾」の下にあり（図17-30）、「塞淵の祠」が鎮座なさる社の前にあると記されている¹⁾。塞淵とは詩経（表5）に出てくる言葉で思慮深いという意味がある。浅い入り江だが、祠の名前（表5）にあやかって淵に見立てたこと、春期には「にはふ畝尾」の桜が散り、周辺がおぼろげになる様子が、和歌の情景（表5）に類似しているとして、雅名となった¹⁾。周囲には約10.5m～12mの岩垣および朱塗りの垣根が組み込まれ、垣沿いに撫子が群植された¹⁾（図66）。また、同所の林には梅、卯木、種々の紅葉樹が混植された¹⁾（表6）。

(31) よるべの石

「塞淵の祠」前の巨石である（図17-31）。自然に出

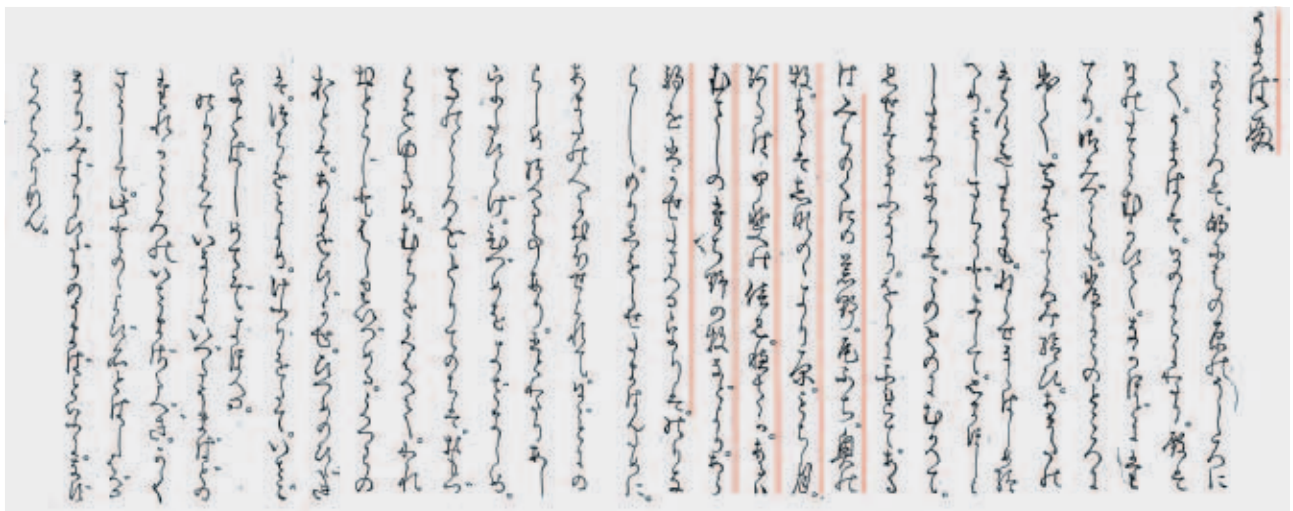


図 63. うまば殿の記述 『蓬萊園記下』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

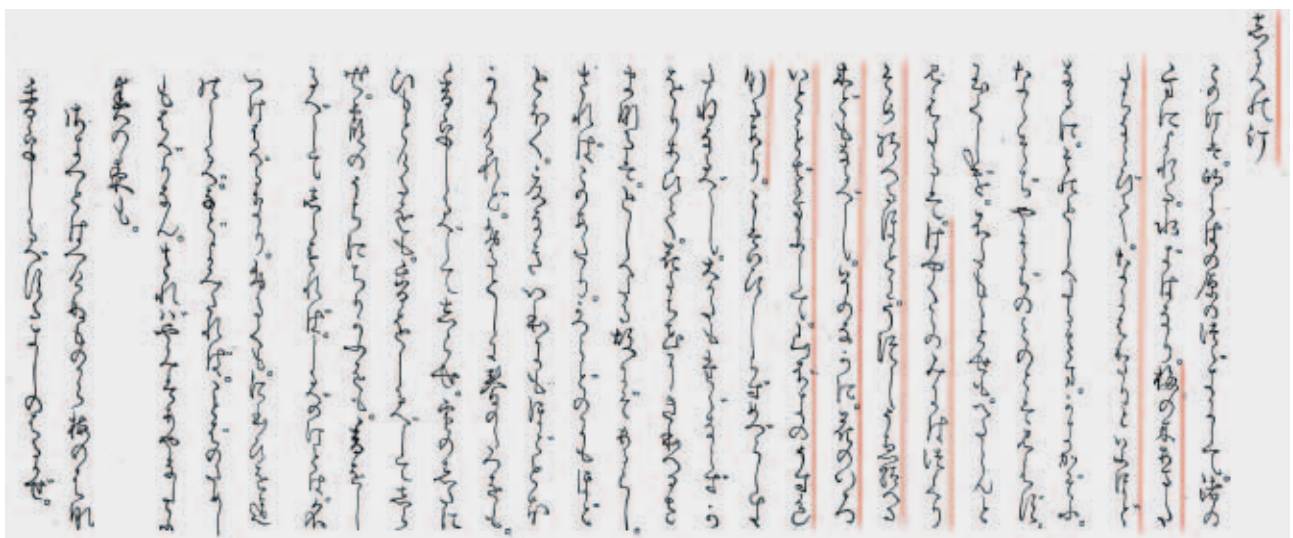


図 64. しるべの汀の記述 『蓬萊園記下』明治24年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

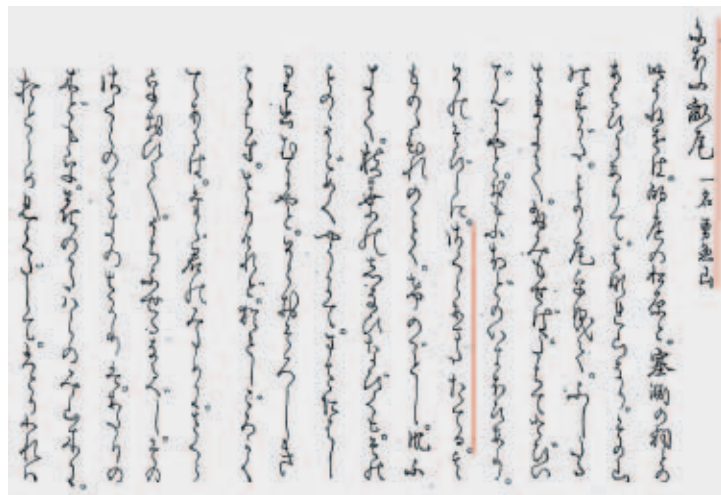


図 65. にほふ畝尾の記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

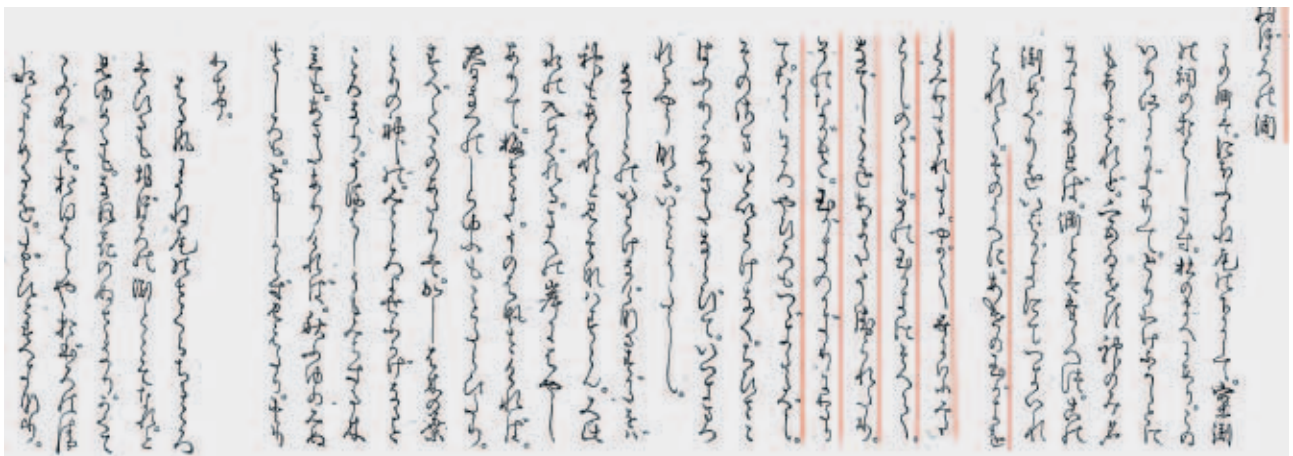


図 66. おぼろの淵の記述 『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

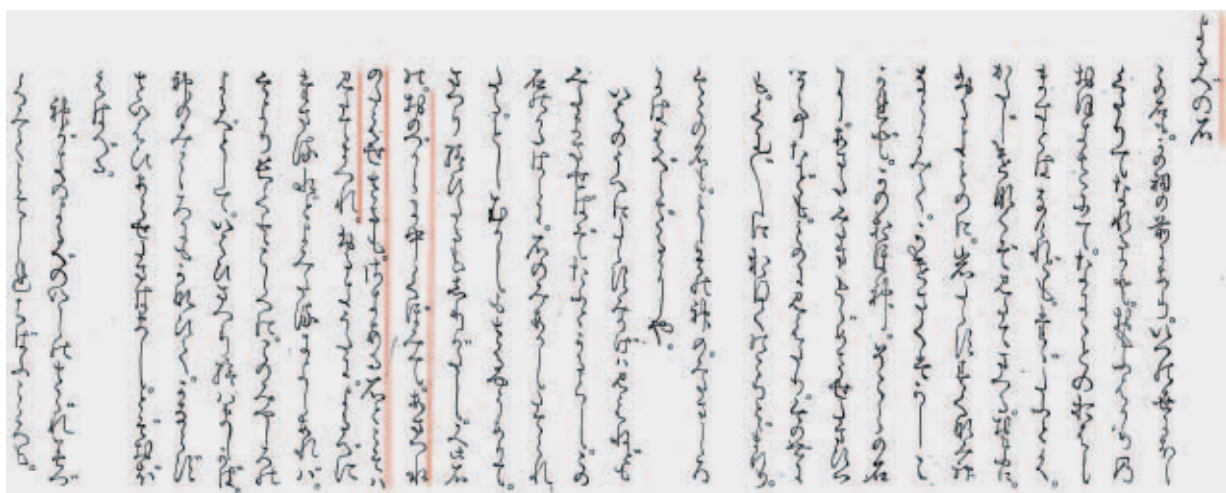


図 67. よるべの石の記述 『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

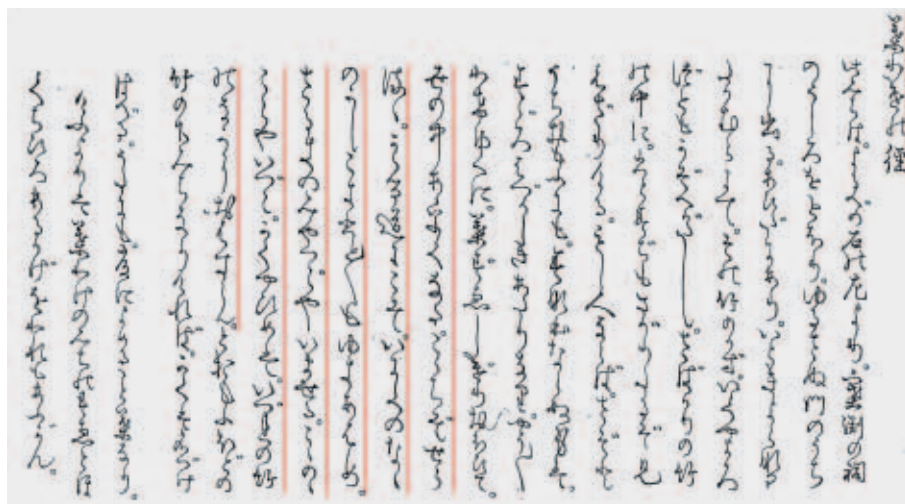


図 68. 葉わきの径の記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)



図 69. 千引のはし

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治 43 年(1910) 東京都立忍岡高等学校蔵

来た窪みがあり、絶えず水が溜まっている様が、神前の瓶にたたえる水「よるべの水」に類似していることを由来として、雅名となった¹⁾(図67)。

(32) 葉わきの径

「塞淵の祠」の後方から「ゆるさぬ門」に続く道沿いの竹林である(図17-32)。竹の青葉が隅々まで茂り、「竹林の七賢人」「竹取物語」の情景を想起させると記されており¹⁾、和歌にも「葉分け」という語句が用いられていることが由来となり、雅名となった¹⁾(図68)。

(33) 千引のはし

「千引のはし」(図69)は「かすとり濱」から「おぼろの淵」に架かる石橋である(図17-33)。巨石で造られているため、日本書紀(表5)に挙げられた「千引の石」に類似しているとして、雅名が付けられた¹⁾(図70)。「千引の石」は、伊弉諾尊が伊弉冉尊から逃れる際、

黄泉と現世との境に立てた、千人の力でようやく引ける大きな岩のことである¹⁾(図71)。

(34) かすとり濱

「千引のはし」と「たか袖がき」の間にある濱で(図17-34)、以前は真砂が敷かれていたことがわかった¹⁾。このため、和歌の「真砂の数に千年の栄えを願う」という箇所(表5)にちなみ、既に同雅名が付けられていた¹⁾。後世になって、真砂はすべて小石に変えられた¹⁾。風が吹き渡り、沖から波が寄せてくる風景が賞嘆された¹⁾(図72)。

(35) たか袖がき

「ゆるさぬ門」の向かい側にある(図17-35)。種々の樹木が岸際まで茂り、門前に芳香樹が群植された¹⁾。四季を通して香りが漂い、まるで誰かの匂い袋の入った袖の残り香のようだと記されている¹⁾。和歌(表5)の情景に類似していること、木立のことを「垣」と詠む例(表5)に由来して、雅名となった¹⁾(図73)。

(36) ゆるさぬ門

「ゆるさぬ門」(図74)は、「金綺楼」の南玄関の門である(図17-36)。松浦熙が「ゆるさぬ門」と木板にしたため、坪庭の軒に掲げたことから、この言葉に習いそのまま雅名とされた¹⁾(図75)。

6. 園内の詳細

(1) 植栽

園内には桜、梅、藤、紅葉など四季折々に楽しめる植栽がされていた。「いはずの浦」には京都山城・井出の里から移植されたヤマブキが植えられていた¹⁾(図39)。「的にはの原」のハギは昔宮城野から移植したといわれており、移植元となった土地は、当時既に消失していたことがわかった。また、ボケがこれほど群

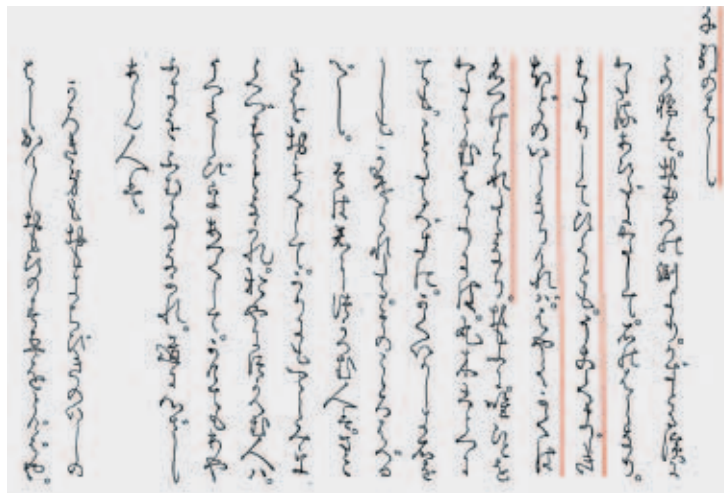


図 70. 千引のはしの記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

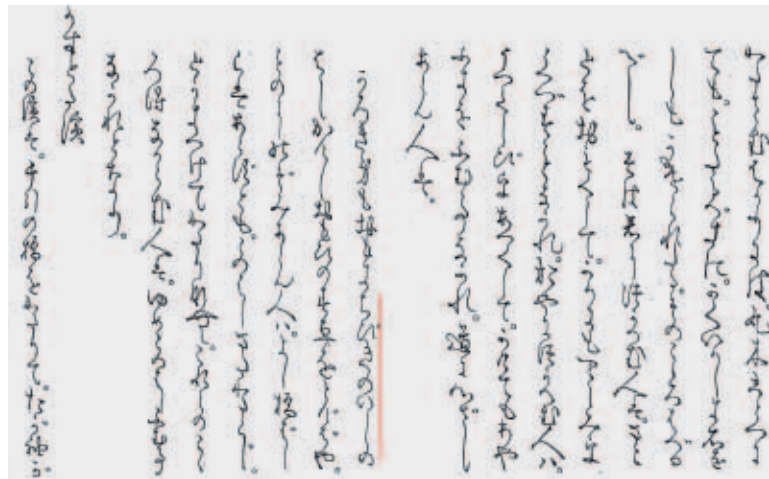


図 71. 千引の石に関する記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

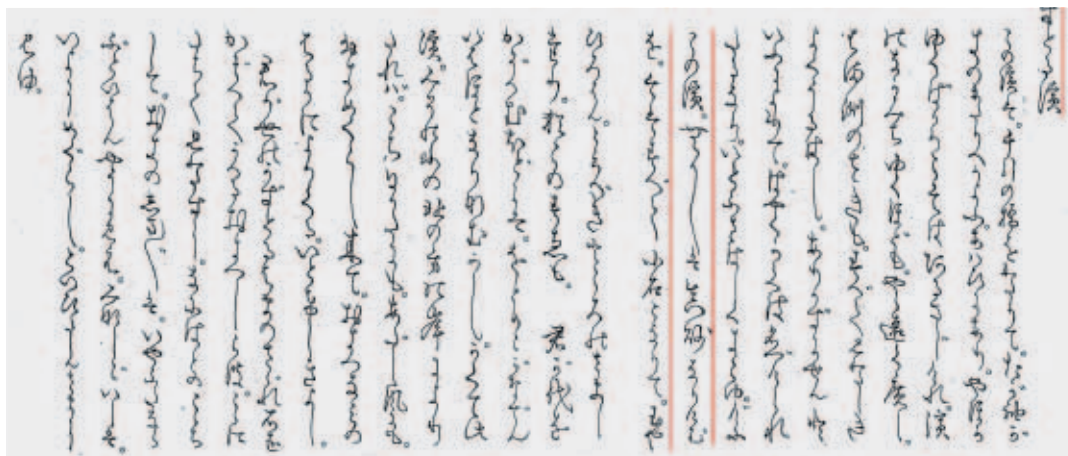


図 72. かすとの濱の記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

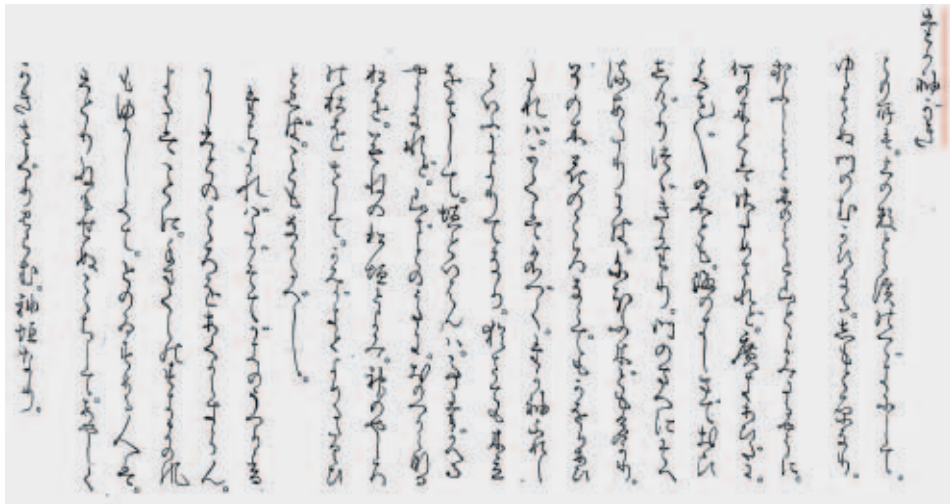


図 73. たか袖がきの記述 『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)



図 74. ゆるさぬ門

『松浦伯爵家蔵版』所収 明治 43 年(1910) 東京都立忍岡高等学校蔵

植されているのは珍しいと記されている¹⁾(図61)。「しるべの汀」に列植された梅のうちには異色の花をつける樹があり、山吹を薄くした色と記されている¹⁾(図64)。「金綺楼」には長さ1丈5尺余り(約4.5m余り)の薔薇の垣根があり、唐国の種であるといわれていた¹⁾(図25)。「手向の社」には樹齢数百年の榎木の古木があり¹⁾(図37)、「はつねばやし」には常緑樹が茂り、椎の大木も存在したことが記されている¹⁾(図53)。このように園内は貴重で珍しい植物で彩られ、古木も大切に残されていた(表6)。

(2) 生息していた生き物

池には鯉(こい)、鮒(ふな)、鯰(なまず)、鰻(うなぎ)、鱈(ぼら)、鮠(はや)、蝦(えび)、石亀(いしがめ)、泥亀(すっぽん)などの生物が生息していたことが記されている¹⁾(図76)。流入した海水で淡水魚が弱り、水面に浮かぶ事があったという記録も残っている¹⁾(図77)。「はつねばやし」には鶯が飛来

し、「手向の杜」にはミミズクやフクロウが生息していた¹⁾(図37)。また、「さし出の崎」の中島にはシギが生息していた¹⁾ことが記されている(図34)。

(3) 灯籠

「下照岡」には園内で最も大きい高さ1丈半(約4.5m)の燈籠が存在した¹⁾(図78)。

「ゆるさぬ門」には静御前が奉納した灯籠が存在した。これは静御前が鎌倉・若宮八幡宮に奉獻した12基の灯籠の一つで、笠と竿は文治年間(1185～1190)、火袋は後世において付け足されたことがわかった。江戸には蓬萊園の他に商家の敷地内にも現存していた¹⁾ことが記されている(図79)。

第9代藩主・松浦清は在職中、本所(東京都墨田区駒形)にある平戸藩下屋敷の池中に据えられていた松英公(第6代藩主篤信)が好んでいた燈籠を、「詠帰亭」脇に移動させた。しかし文化3年(1806)の火災により損壊し林中で発見されたため、様相および寸法が図と共に記録された。損壊前は高さ約258cm、笠石幅約114cmであったのが、損壊後は高さ約168cm、笠石はおおよそ3分の2に割れた³⁾(図80)。

『蓬萊園記』には、園内に据えられた三十余りの石灯籠の灯りが不知火のように見えた¹⁾と記されている(図81)。

松浦家家臣である蒲生東九郎との書簡のやり取りがまとめられた『書翰集』には、天保5年(1834)の「蓬萊園之図」に描かれている灯籠と非常に類似した灯籠が記されている(図82)。また、明治期の写真を見ると、灯籠が存在していたことがわかる(図83)。

(4) 各景で想像された情景

「葉わけの径」の隅々に茂る竹の青葉は、「竹林の七賢人」や「竹取物語」の情景を想起させ¹⁾(図68)、別名「桃源屈」といわれる「三千代の洞」は、桃源郷に見立てられた¹⁾(図47)。「かすとの濱」から見える「三児岩」「両児嶋」「みなし子石」は、それぞれ難波津、小豆島、淡路島に見立てられていたことが明らかとなっ

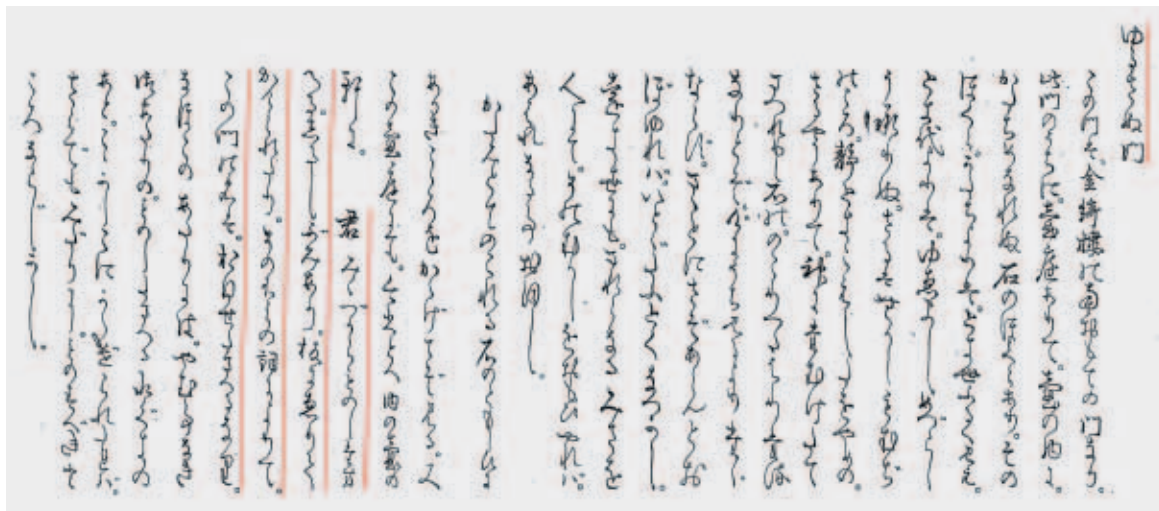


図 75. ゆるさぬ門の記述 『蓬萊園記 下』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

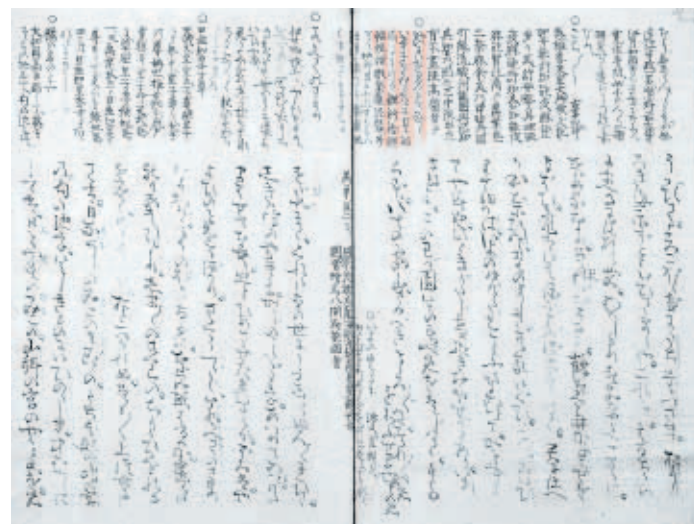


図 76. 池の生き物に関する記述
『蓬萊園記 上』天保 5 年(1834) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

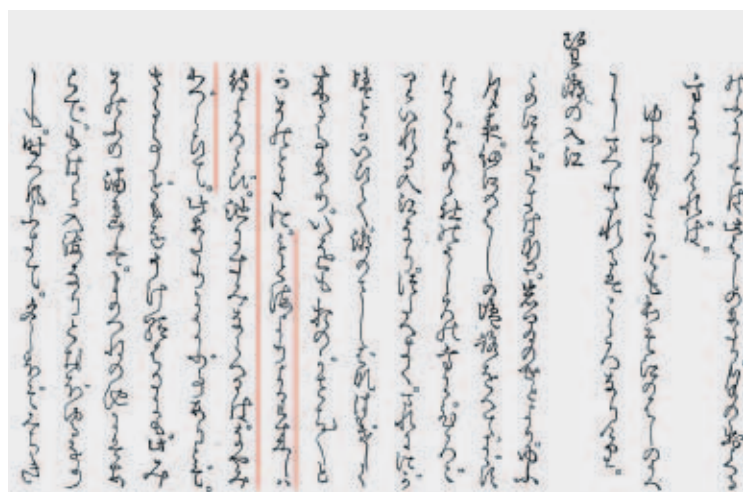


図 77. 池に海水が流入していた記述
『蓬萊園記 上』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

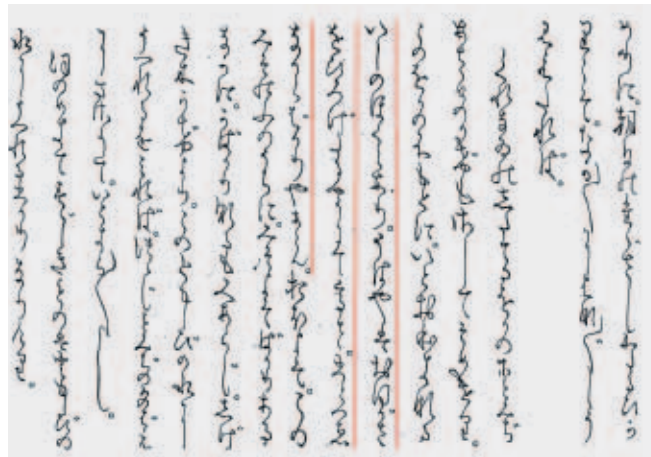


図 78. 下照岡の灯笼の記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年 (1891) 国立国会図書館蔵 (26 × 18.5cm)

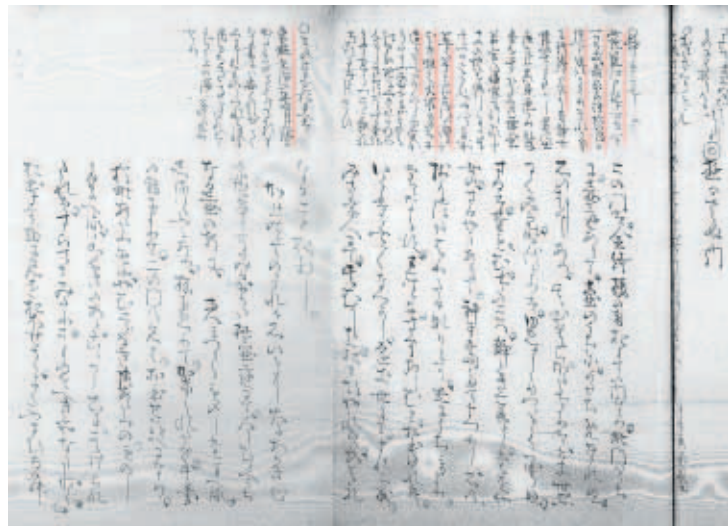


図 79. ゆるさぬ門の記述

『蓬萊園記 舛』天保 5 年 (1834) 国立国会図書館蔵 (26 × 18.5cm)

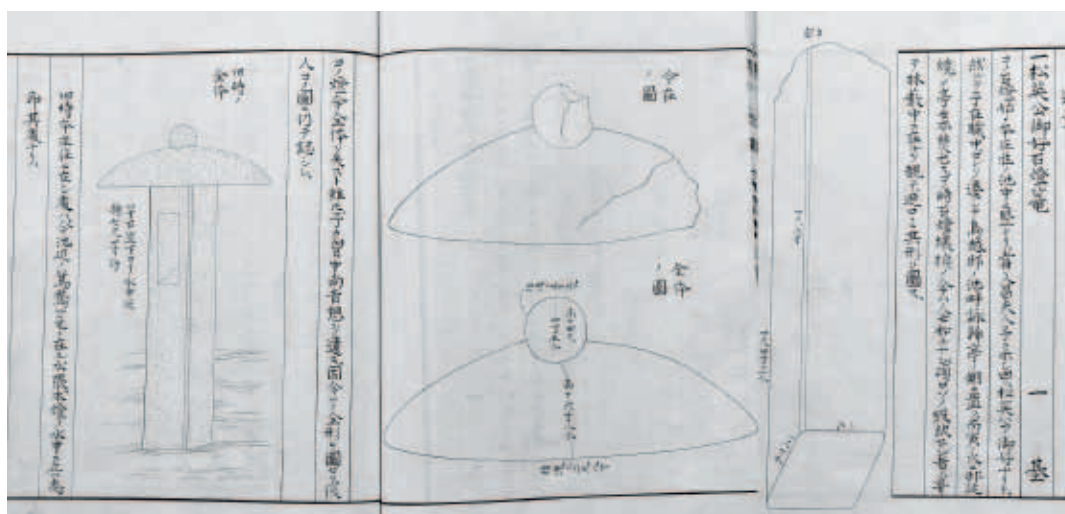


図 80. 詠帰亭脇に存在した灯笼に関する記述

『甲子夜話』文政 4 年 (1821)～天保 12 年 (1841) 第 68 卷 松浦史料博物館蔵 (26.5 × 19cm)

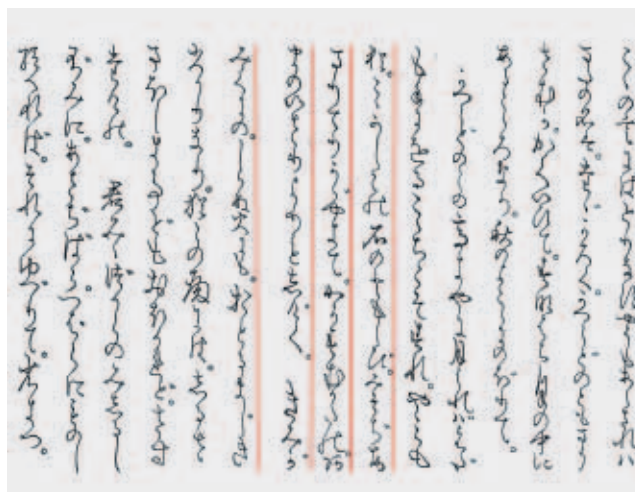


図 81. 園内の石灯籠の記述

『蓬萊園記 上』明治 24 年 (1891) 国立国会図書館蔵 (26 × 18.5cm)

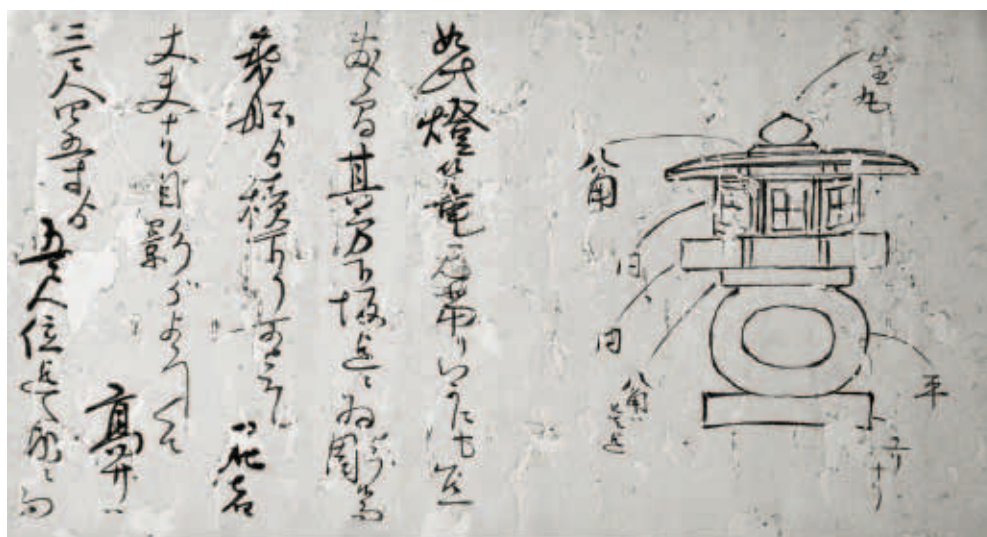


図 82. 灯籠の絵図 『書翰集』年代不詳 松浦史料博物館蔵 (28 × 37cm)



図 83. 書翰集に描かれている灯籠 (明治期頃)

東京都立忍岡高等学校蔵

た¹⁾。「おもかげの砌」から見る「影ふむ橋」は夕虹を渡したように、「さし出の崎」は青海原に朝雪が漂うように、「両児嶋」「三児岩」「みなし子石」は波間にまき散らされたように見える¹⁾と記されている。

7. 園内の見どころと平戸との繋がり

『蓬萊園記』の序文には、かつて島を好む上様が名高い人々にそのほどを伝え、庭を造らせたと記されている (図 84)。また、遙かな海山を身近に並べ、島間につつかり崩れる波の響きや嵐にざわめく梢の響きをどうして聞くことができようか。池の様は上様の心と共に広きにわたって海を成し、潮の通いがあり朝夕満ち引きがあると記しており、作庭を命じた松浦隆信が島を好んでいたことや、潮入りの池が海に見立てられ

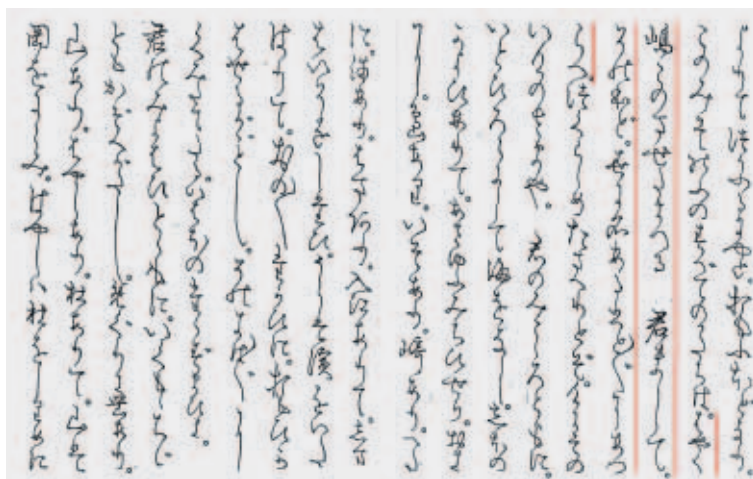


図 84. 先代が島を好んでいた記述

『蓬萊園記 上』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

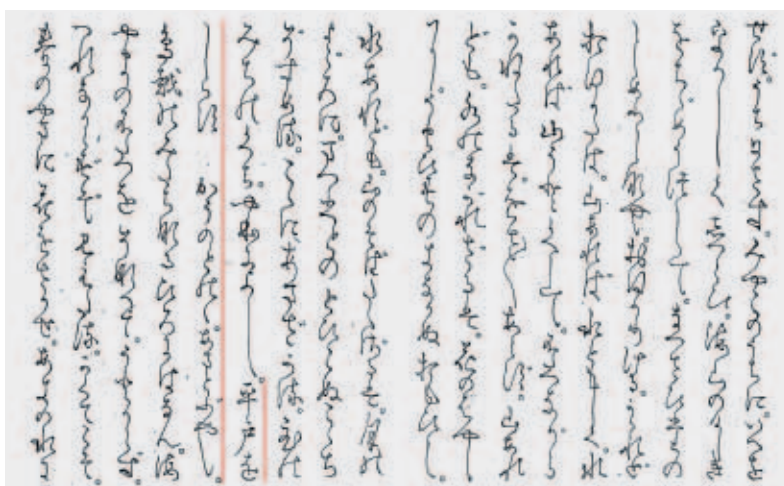


図 85. 平戸に関する記述

『蓬萊園記 上』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)

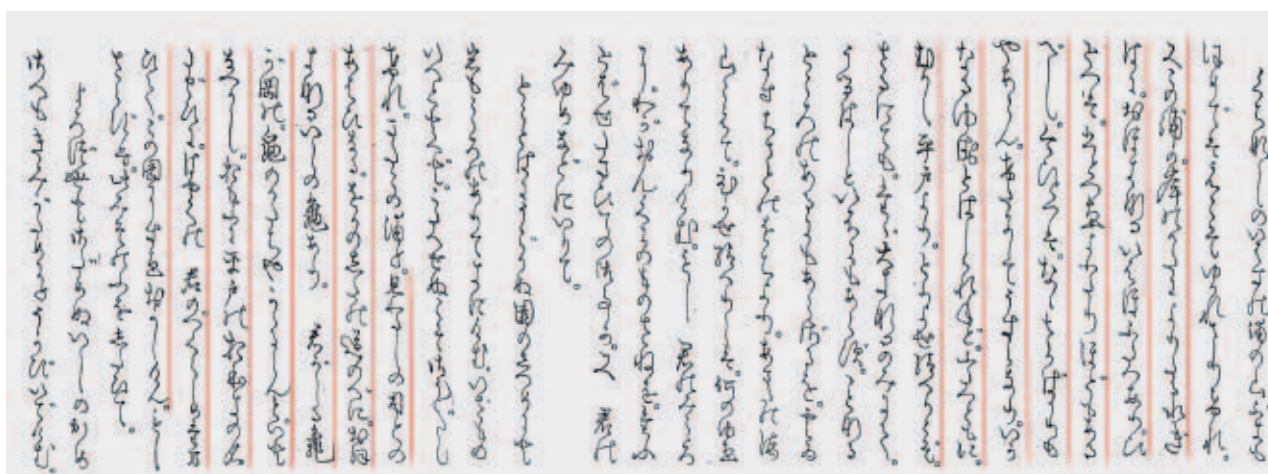


図 86. 平戸の石と亀石が置かれていた記述

『蓬萊園記 上』明治 24 年(1891) 国立国会図書館蔵(26 × 18.5cm)



図 87. 勇魚山とよばれていた記述

『蓬萊園記 下』明治 24 年 (1891) 国立国会図書館蔵 (26 × 18.5cm)

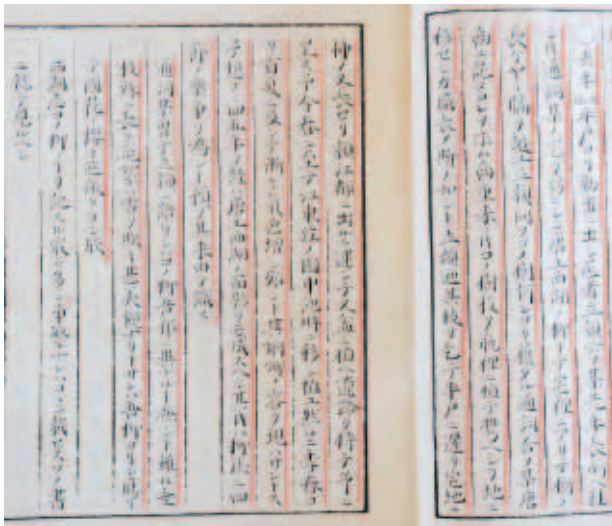


図 88. 柳に関する記述

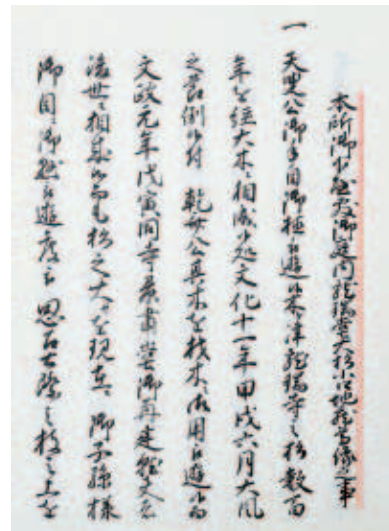
『甲子夜話続編』文政 4 年 (1821)～天保 12 年 (1841) 第 39 巻
松浦史料博物館蔵 (26.5 × 19cm)

図 89. 松浦清に平戸の杉 (衝立) を献上した記述

『圓融山龍瑞寺永統御趣法帳』天保 10 年 (1839)～慶応 4 年 (1868)
松浦史料博物館蔵 (27 × 19cm)

ていたことが考えられる。さらに、「遙かなる地への
思いを馳せ、ここに平戸を知らしめることにする」(図
85)と記していることから、平戸への郷愁の念が蓬
萊園に込められていることが窺える。

「いはずの浦」の水際には、平戸から取り寄せられ
た1丈(約3m)と7尺(約2.1m)の扁平な大岩が二
つ据えられた¹⁾。また、「見わたしの司」との間の丘
下の道沿いには、先代藩主が平戸城の旧名・亀岡城の
名に由来する「亀岡」の亀を模して造らせた「亀石」
が置かれていた¹⁾(図86)。

「にほふ畝尾」は、山の形が鯨に似ていることから、
別名「勇魚山」と呼ばれており、鯨で栄えていた平戸
が益々繁栄するよう祈願したことが明らかとなった¹⁾
(図87)。

「あやおる岸」には、水際を降りる階段の傍らに柳

の古木が植栽されていた。その柳が手招きをするよう
になびく風景に情緒があるため、秀姫の思い入れが強
い場所であったと記されている¹⁾(図50)。この柳は、
平戸より勤番していた医師の立瀬が出島の通詞から唐
土西湖の柳をもらい受け、松浦清に献上したものであ
り、『甲子夜話』に記された天保4年(1833)に松浦
清が植えた柳だと考えられる³⁾(図88)。

また、熙公の菩提寺である龍瑞寺(現:善山普門寺)
の歴史と詳細が記された『圓融山龍瑞寺永統御趣法帳』
には、江戸の下屋敷に龍瑞寺の大杉で作られた衝立を
置いたことが記録されている(図89)。文化11年(1814)、
龍瑞寺の境内の大杉が倒れ、松浦清がその大杉を描き
残している(図90)。文政元年(1818)、境内の景肅
堂が杉で再建され、杉の大きさを子孫に示すため衝立
が作られ(図91)、これと同じものを江戸の松浦清に



図 90. 天叟手栽杉樹北面圖及び南面圖

松浦史料博物館蔵 (62 × 44cm)



図 91. 大杉小口の衝立 (118 × 127cm) 龍端寺(善山普門寺)所蔵

献上したと記されている。下屋敷内の「地藏堂」に衝立が安置されたため「龍瑞堂」ともいわれたという。松浦清の想入れがある杉を江戸まで持って行ったことから、遠く離れた江戸の屋敷から平戸を偲んでいたことが窺える。

8. おわりに

園内は、様々な花木や各地から移植された貴重な植物で彩られており、鳥や小動物、淡水魚など多様な生き物が生息していたことがわかった。また、園内で最も大きい「下照岡」の灯籠や「詠婦亭」脇に移動させた灯籠の詳細も明らかとなった。「蓬萊園三十六景」の見どころから景色を眺め、詩を詠み和歌の世界や理想郷の景色を連想することも、茶道、弓術、馬術などの諸芸に加え、楽しみの一つであったと考える。

『蓬萊園記』の制作により、蓬萊園のありのままの姿を書き記すことで、蓬萊園ならではの美しい情景を守るよう後世の者に伝えようとしていたものと考えられる。松浦熙は先代から受け継いだ庭園を後世に残すため、古くから残る一里塚や石塔などをそのまま装飾として用い、故郷平戸を感じさせる海に浮かぶ島々の風景、亀岩や平戸の石、鯨の形の山などを園内に織り込んだことがわかった。また、思入れのある平戸の杉や、平戸に伝わった中国西湖の柳を江戸に持ってきたことも明らかとなった。園内の池を海に見立て、平戸の景色と重ね合わせて、遠く平戸に思いをよせていたことが感じられる。

要 約

平戸藩松浦家の江戸屋敷「蓬萊園」は、寛永年間(1624～1645)に第3代平戸藩主・松浦隆信が、小堀遠州と江月らを中心に指揮を執らせ、鳥越邸内に作庭した。第10代平戸藩主・松浦熙が『蓬萊園記』の制

作を「橘守部」に依頼し、「蓬萊園三十六景」が考案され園内の概要が記録された。本研究では、松浦家に伝わる史料に基づいて園内の詳細とともに、庭園に込められた意匠や松浦熙の故郷・平戸への郷愁の念が込められていたことが明らかとなった。

参考文献

- 1) 国立国会図書館蔵：橘守部：蓬萊園記艸（1834）、蓬萊園記上・下（1891）：椎本吟社
- 2) (財)松浦史料博物館蔵：松浦熙：亀岡随筆（1833～58）、全88巻
- 3) (財)松浦史料博物館蔵：松浦静山：甲子夜話（1821～41）、全278巻
- 4) 山口直路：松浦伯爵家蔵版（1910・1911）、全2巻
- 5) (財)東京都生涯学習文化財団編（2005）：台東区向柳原町遺跡―東京都台東地区単位制高等学校の改築及び大規模改修工事に伴う調査―：東京都埋蔵文化財センター、377pp
- 6) 東京市編（1927）：東京市史稿遊園編第三：東京市、754-813pp
- 7) 龍居松之助：蓬萊園の保存に就て（1934）：造園雑誌、120-123pp
- 8) 田村剛：蓬萊園の検討：造園研究第22輯 所収8項
- 9) 東京大学史料編纂所蔵：家世後伝 卷之六 諦乗公下
- 10) 松浦伯爵家編修所蔵：松浦詮伯年譜：10項

本研究は、JSPS 科学研究費助成事業（基盤研究 C）課題番号 15K07834 の助成を受けて行った。

資料の出典ならびに所蔵

タイトル	出典	所蔵
図1 向東庵の記録	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図2 大江戸絵図 天保年間 (1830～1844)		
図3 造成に関する記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図4 池に関する記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図5 装飾に関する記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図6 鳥越邸之図 文化9年 (133×203cm)		松浦史料博物館蔵
図7 蓬萊園之図 昭和11年	東京市史稿所収	国立国会図書館蔵
図8 八天狗神を明岑楼に祀った記述	亀岡隋筆 (29×18cm)	松浦史料博物館蔵
図9 八天狗神に関する記述	亀岡隋筆 (29×18cm)	松浦史料博物館蔵
図10 残された蓬萊園の一部 (現 忍岡高等学校内)		
図11 「望潮の入江」の一部 (現 忍岡高等学校内)		
図12 明治期頃の蓬萊園 (南西からの様子)		東京都立忍岡高等学校蔵
図13 明治期頃の蓬萊園 (池の中心部)		東京都立忍岡高等学校蔵
図14 松浦熙 肖像画 天保3年 (1832) (125×58cm)		松浦史料博物館蔵
図15 西御殿に関する記述	亀岡随筆 (29×18cm)	松浦史料博物館蔵
図16 蓬萊園之図 天保5年 (1834)	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図17 蓬萊園之図 (63.5×79.5cm)		東京江戸博物館蔵
図18 岩間の迫門	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図19 岩間の迫門の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図20 細江の橋の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図21 望潮の入江の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図22 金綺楼	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図23 雅名に関する記述	蓬萊園記 艸 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図24 「旧懐に堪えず」と言及している記述	甲子夜話 (26.5×19cm)	松浦史料博物館蔵
図25 別名「かつらどの」の由来についての記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図26 金綺楼内に掲げられた扁額と書の記述	蓬萊園記 艸 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図27 金綺楼内に掲げられた扁額の記述	蓬萊園記 艸 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図28 影ふむ橋の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図29 反り橋 (影ふむ橋) に関する記述	亀岡随筆 (29×18cm)	松浦史料博物館蔵
図30 鳥越邸之図 文化9年 (203×133cm)		松浦史料博物館蔵
図31 鳥越邸之図 明治申年 (148×191cm)		松浦史料博物館蔵
図32 見わたしの司の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図33 さし出の崎	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図34 さし出の崎の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図35 手向の杜	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図36 手向の杜の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図37 強飯を奉納していた記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図38 うきくさの橋の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図39 いはずの浦の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図40 壺墳の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図41 両児嶋の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図42 三児岩の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図43 橘守部が熙の健勝を祝い詠んだ詩	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図44 みなし子石の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図45 たゆたふ道の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図46 おもかげの砌の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図47 三千代の洞の植栽に関する記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図48 三千代の洞の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図49 あやおる岸	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図50 あやおる岸の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図51 下照岡の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図52 かがみのわだの記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図53 はつねばやしの記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図54 夕映えの小軸の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図55 詠帰亭門	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図56 詠帰亭の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図57 詠帰亭内の扁額に関する記述	蓬萊園記 艸 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図58 別名「夏なきいは」の由来に関する記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図59 色香山の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図60 ゆかりの磯の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図61 的にはの原の植栽に関する記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図62 弓術が行われていた記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図63 うまば殿の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵

タイトル	出典	所蔵
図 64 しるべの汀の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 65 にはふ畝尾の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 66 おぼろの淵の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 67 よるべの石の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 68 葉わきの径の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 69 千引のはし	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図 70 千引のはしの記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 71 千引の石に関する記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 72 かすとり濱の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 73 たか袖がきの記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 74 ゆるさぬ門	松浦伯爵家蔵版 (38×26.5cm)	東京都立忍岡高等学校蔵
図 75 ゆるさぬ門の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 76 池の生き物に関する記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 77 池に海水が流入していた記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 78 下照岡の灯籠の記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 79 ゆるさぬ門の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 80 詠帰亭脇に存在した燈籠に関する記述	甲子夜話 (26.5×19cm)	松浦史料博物館蔵
図 81 園内の石灯籠の記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 82 灯籠の絵図	書翰集 (28×37cm)	松浦史料博物館蔵
図 83 書翰集に描かれている灯籠 (明治期頃)		東京都立忍岡高等学校蔵
図 84 先代が鳥を好んでいた記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 85 平戸に関する記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 86 平戸の石と亀石が置かれていた記述	蓬萊園記 上 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 87 勇魚山とよばれていた記述	蓬萊園記 下 (26×18.5cm)	国立国会図書館蔵
図 88 柳に関する記述	甲子夜話続編 (26.5×19cm)	松浦史料博物館蔵
図 89 松浦清に平戸の杉 (衝立) を献上した記述	圓融山龍瑞寺永統御趣法帳 (27×19cm)	松浦史料博物館蔵
図 90 天叟手栽杉樹北面圖及び南面圖 (62×44cm)		松浦史料博物館蔵
図 91 大杉小口の衝立 (118×127cm)		龍端寺所蔵